

『西日本における前方後円墳消滅過程の比較研究』抜刷
(平成13~平成15年度科学研究費補助金 基盤研究(B)(1)研究成果報告書)
大阪大学大学院文学研究科 福永伸哉編
2004年3月発行

調査報告

勝福寺古墳発掘調査概報

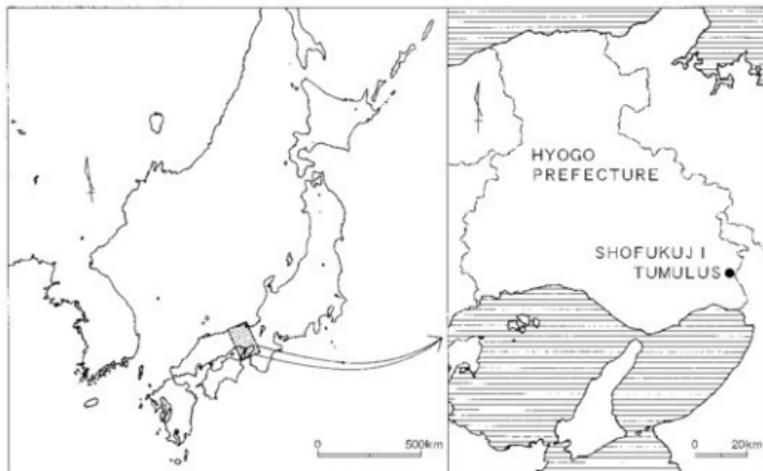
編集
寺前直人

調査報告



例　　言

- 1 本報告は、兵庫県川西市勝福寺古墳において2001年から2003年までに行われた2次～7次調査の概要報告である。
- 2 2・4・6次が川西市教育委員会を主体として、3・5・7次が科学研究費補助金を受けて、大阪大学大学院文学研究科考古学研究室が実施している。3・5・7次調査についてには、同文学研究科助教授福永伸哉が団長とし、2001年と2002年は高知大学人文学部助教授清家章(当時・大阪大学大学院文学研究科助手)が、2003年は同文学研究科助手寺前直人が調査を担当した。本書では、2～7次までの調査成果をあわせて収録した。
- 3 2002年と2003年の現地説明会の際には、独立行政法人通信総合研究所門林理恵子氏、河合由紀子氏のご協力によりインターネット上での実況中継を行った。
- 4 調査の参加者名、遺物の整理・実測・製図の分担については、本文中および挿図目次に記す。写真的撮影は清家・寺前ほか大学院生が担当した。
- 5 レベルはすべて海拔(東京湾平均海面)を表し、図中方位は座標北を示す。座標系については日本測地座標系を用いている。
- 6 本報告の執筆は、寺前のほか、長友朋子・林正憲・中村大介・中原計・石井智大・高松雅文・和田一之輔・中川二美・三好玄・田中由理・望月誠子・渡辺今日子・東影悠が担当した。分担箇所は文中に記している。
- 7 本報告の編集は福永の指導の下、寺前が担当した。



勝福寺古墳発掘調査概報

目 次

1 勝福寺古墳の位置	三好玄	305
2 調査経過		308
(1) 過去の調査	田中由理	308
(2) 調査経過	寺前直人	309
(3) 謝 辞	寺前直人	310
3 墳丘の構造		311
(1) 調査区の設定	寺前直人	311
(2) 後円部北調査区	寺前直人・林正憲	311
(3) 後円部北東調査区	石井智大	314
(4) 後円部西調査区	長友朋子・望月誠子	316
(5) 後円部西セクション	高松雅文	318
(6) 東クビレ部調査区	和田一之輔・東影悠	322
(7) 西クビレ部調査区	中川二美	324
(8) 前方部南調査区	望月誠子	325
(9) 前方部南東調査区	渡辺今日子	326
(10) 前方部西調査区	中原計	330
4 墳頂部および埋葬施設の構造		331
(1) 墳頂調査区	中村大介	331
(2) 前方部墳頂南棺調査区	三好玄	336
5 出土遺物		338
(1) 須恵器	石井智大	338
(2) 墳 輪	和田一之輔	340
6 総 括	寺前直人	347

図表目次

図1	周辺遺跡分布図(三好製図)	306
表1	周辺古墳一覧	307
図2	勝福寺古墳周辺遺跡分布図(三好製図)	308
図3	調査区配置図(中原製図)	312
図4	後円部北調査区平面図・断面図(東影製図)	313
図5	後円部北調査区円筒埴輪(1)出土状況図(竹山智恵製図)	314
図6	後円部北調査区円筒埴輪(2)出土状況図(廣藤紀子製図)	314
図7	後円部北東調査区平面図・断面図(中川製図)	315
図8	後円部西調査区平面図・断面図(望月製図)	317
図9	後円部西セクション見通し図(高松製図)	319
図10	東クリビレ部調査区平面図・断面図(竹山製図)	323
図11	東クリビレ部調査区北壁断面図(竹山製図)	324
図12	西クリビレ部調査区平面図・断面図(中久保辰夫製図)	325
図13	前方部南調査区平面図・断面図(望月製図)	327
図14	前方部南調査区北壁断面図(廣藤製図)	329
図15	前方部南溝全区南壁・東壁断面図(望月製図)	330
図16	前方部南東調査区平面図・断面図(中久保製図)	331
図17	前方部西調査区平面図・断面図(中原製図)	332
図18	墳頂調査区平面図・断面図(廣藤製図)	333
図19	墳頂調査区後円部盛土と前方部盛土の様相(廣藤製図)	335
図20	前方部墳頂南棺調査区平面図・断面図(東影製図)	337
図21	須恵器実測図(中川製図)	339
図22	円筒埴輪実測図(三好製図)	341
図23	甲冑形埴輪実測図(三好製図)	344
図24	形象埴輪底部実測図(三好製図)	345

図版目次

- 図版 1 1. 後円部北調査区全景(1)(北から) 2. 後円部北調査区全景(2)(北から)
3. 後円部北調査区埴輪出土状況
- 図版 2 1. 後円部北東調査区全景(北から) 2. 後円部北東調査区溝状遺構(東から)
3. 後円部北東調査区埴輪出土状況(西から)
- 図版 3 1. 後円部西調査区全景(西から) 2. 後円部西セクション全景(北から)
3. 後円部西セクション全景(西から)
- 図版 4 1. 東クビレ部調査区(2002年度)全景(東から) 2. 東クビレ部調査区(2003年度)全
景(南から) 3. 東クビレ部調査区(2002年度)全景(西から)
- 図版 5 1. 東クビレ部調査区(2002年度)北壁土層(1) 2. 東クビレ部調査区(2002年度)北壁
土層(2) 3. 東クビレ部調査区(2002年度)西壁土層 4. 東クビレ部調査区(2003年
度)土坑(北西から) 5. 西クビレ部調査区全景(西から)
- 図版 6 1. 前方部南調査区(2003年度)全景(南から) 2. 前方部南調査区東壁土層
- 図版 7 1. 前方部南調査区(2002年度)全景(南から) 2. 前方部南調査区(2002年度)土層
(上:北壁 下:西壁) 3. 前方部南東調査区全景(南東から)
4. 前方部西調査区全景(西から)
- 図版 8 1. 墳頂調査区(2001年度)全景(北から) 2. 墳頂調査区(2001年度)土層(上:東壁
下:西壁) 3. 墳頂調査区(2002年度)全景(北から)
- 図版 9 1. 墳頂調査区(2002年度)鉄器出土状況 2. 墳頂調査区(2002年度)盜掘坑土層
3. 前方部墳頂南棺調査区全景(北から)
- 図版10 1. 須恵器壺蓋 2. 須恵器無蓋高壺 3. 須恵器器台 4. 円筒埴輪(1)
5. 円筒埴輪(2) 6. 円筒埴輪(3)
- 図版11 1. 円筒埴輪(4) 2. 甲冑形埴輪
- 図版12 1. 円筒埴輪の外面調整 2. 円筒埴輪の突帶
3. 円筒埴輪底部のヘラケズリ(外面) 4. 円筒埴輪底部のヘラケズリ(内面)
5. 円筒埴輪底面のヘラギリ 6. 円筒埴輪底面の沈線
7. 円筒埴輪底部のヒモズレ 8. 円筒埴輪底部のユビズレ

勝福寺古墳発掘調査概報

1 勝福寺古墳の位置

勝福寺古墳は、兵庫県川西市火打2丁目に所在する(図1・2)。川西市は兵庫県の東端に位置し人口約16万人、面積約53平方kmの市である。市南部には阪急電鉄宝塚線・JR宝塚線と中国自動車道が東西にのびる。市の中心である阪急電鉄川西能勢口駅から北へは能勢電鉄によって豊能町、猪名川町方面へ通じている。大阪・神戸市内からともに30分程度の距離であり、両地域を通勤圏とする住宅都市として発展している。

伊丹市との市境南端より約3km北の地点に東西にのびる断層(有馬高櫻構造線)を境に市域の地形は二分される。北部の多田・東谷地区は、標高200~300mの山々とその間をぬって流れる猪名川・能勢川の流れに沿う多田盆地、東谷盆地などの小盆地とをもつ山地帯である。南部は大阪平野に流れ出た猪名川の西岸にひろがる平野と台地上に展開し、兵庫県南東部から大阪府北西部にひろがる通称西摂平野に属する。北部と南部で大きく異なる自然景観を有することが特徴である。

当地域は猪名川をくだれば大阪湾に至り、北に岬をこえると山陰道に通じることができる交通の要衝として古くから知られている。JR福知山線が開通するまで猪名川水系沿いの道は三田方面をはじめ、加古川水系に向かう播磨方面への主要な交通路であった。また、能勢街道は現在でも丹波方面へぬける幹線として機能している(武藤1974b)。

市域の中央を南流する猪名川は五月山丘陵・長尾山丘陵の間を抜け、平野部に達する。勝福寺古墳はこの丘陵と平野の境界付近、猪名川右岸の長尾山丘陵先端部に位置する。北から南にくだる斜面の標高57~54mの位置を占め、眼下には南流する猪名川と西摂平野を望むことができる。阪急川西能勢口駅から北約1kmに位置し、徒歩ならば駅から20~30分ほどの距離にある。現在は浄土真宗勝福寺の裏山に所在する。

(三好玄)



図1 周辺遺跡分布図

表1 周辺古墳一覧

No.	古墳名	所在地	規模(m)	時期	No.	古墳名	所在地	規模(m)	時期
1	鞍馬遺跡	川西市	11	-	54	太鼓塚古墳群	豊中市	-	後期
2	上ヶ芝1号墳	川西市	11	-	55	柴原待兼山古墳	豊中市	-	前期
3	上ヶ芝2号墳	川西市	15	-	56	待兼山2号墳	豊中市	20?	中期?
4	松ヶ芝1号墳	川西市	14	-	57	待兼山3号墳	豊中市	-	中期
5	松ヶ芝2号墳	川西市	15	-	58	待兼山4号墳	豊中市	-	中期
6	松ヶ芝3号墳	川西市	15	-	59	待兼山5号墳	豊中市	10?	中期
7	古江古墳	池田市	13	後期	60	石冢古墳	豊中市	-	-
8	古江北古墳	池田市	-	後期	61	麻田御神山古墳	豊中市	-	前期
9	勝福寺古墳	川西市	40	後期	62	金寺山隨寺(第1次)	豊中市	-	後期
10	萩原古墳群	川西市	-	後期	63	新免宮山北塚古墳	豊中市	-	後期
11	小戸遺跡	川西市	20	前中期	64	新免宮山南塚古墳	豊中市	-	後期
12	豆板古墳群	川西市	-	後期	65	新免1号墳	豊中市	13	後期
13	雲雀丘古墳群	宝塚市	-	後期~終末期	66	新免2号墳	豊中市	23	後期
14	雲雀丘東尾根古墳群	宝塚市	-	後期~終末期	67	新免3号墳	豊中市	18	後期
15	雲雀丘西尾根古墳群	宝塚市	-	後期~終末期	68	新免4号墳	豊中市	16	後期
16	平井古墳群	宝塚市	-	後期~終末期	69	新免5号墳	豊中市	-	後期
17	山本庵古墳群	宝塚市	-	後期~終末期	70	山ノ上遺跡(10次)	豊中市	7	前期
18	山本古墳群	宝塚市	-	後期~終末期	71	山ノ上遺跡(14次)	豊中市	-	後期
19	中筋手古墳群	宝塚市	-	後期~終末期	72	大石塚古墳	豊中市	76+	前期
20	中山寺白鳥塚古墳	宝塚市	-	終末期	73	小石塚古墳	豊中市	49	前期
21	中山莊園古墳	宝塚市	11	終末期	74	小塚古墳	豊中市	10~15	中期
22	万葉古塚	宝塚市	54	前中期	75	垂中人塚古墳	豊中市	56	中期
23	長尾山古墳	宝塚市	36	前期?	76	御獅子塚古墳	豊中市	55	中期
24	安倉高塚古墳	宝塚市	10+	前中期	77	孤塚古墳	豊中市	27	中期
25	木船1号墳	池田市	15	後期	78	北天平塚古墳	豊中市	24	中期
26	木部2号墳	池田市	-	後期	79	南天平塚古墳	豊中市	24	中期
27	木部桃山古墳	池田市	-	後期	80	女塚古墳	豊中市	-	中期
28	紅葉古墳	池田市	-	後期以降	81	鐘塚塚古墳	豊中市	30	前期
29	楓三堂古墳	池田市	27	前中期	82	深堀古墳群(第1次)	豊中市	15+	中期
30	銀三堂南古墳	池田市	7	後期以降	83	桜塚6次古墳	豊中市	20?	後期
31	池田茶臼山古墳	池田市	64	前中期	84	桜塚第38号墳	豊中市	-	中期
32	城山古塚	池田市	-	後期以降	85	利倉山遺跡(第1次)	豊中市	8	中期
33	池田城下塚	池田市	-	後期	86	緑ヶ丘古墳群	伊丹市	-	後期
34	善海1号墳	池田市	10	後期以降	87	荒牧古墳	伊丹市	10?	-
35	善海2号墳	池田市	-	後期	88	女郎塚古墳	伊丹市	70	前期
36	五月ヶ丘古墳	池田市	8	後期以降	89	有同城(伊丹郷町遺跡第204次)	伊丹市	-	前期
37	野川塚古墳	池田市	10	後期	90	鶴塚古墳	伊丹市	-	前期
38	風吹古墳	池田市	12	後期	91	南本町遺跡古墳1	伊丹市	15	後期
39	心臓古墳	池田市	-	後期	92	南本町遺跡古墳2	伊丹市	-	-
40	鉢塚古墳	池田市	40	後期	93	南本町遺跡古墳3	伊丹市	-	-
41	二字古墳	池田市	45	後期	94	猪名寺廢寺	尼崎市	-	中期
42	宇佐駒名津彦神社古墳	池田市	30	後期以降	95	御園塚古墳	伊丹市	52	中期
43	宮ノ前1号墳	池田市	9	後期	96	園田大塚山古墳	尼崎市	42	後期
44	宮ノ前2号墳	池田市	11	後期	97	雨濱水吉古墳	尼崎市	46	中期
45	宮ノ前3号墳	池田市	-	-	98	武満塚古墳	尼崎市	-	-
46	宮ノ前4号墳	池田市	-	中期	99	池田山古墳	尼崎市	71	中期
47	坂池北遺跡(17次)	龜山市	8	中期	100	柏木古墳	伊丹市	55	中期
48	鷹塚古墳	池田市	28	-	101	御園古墳	尼崎市	60	中期
49	龜山南遺跡	池田市	-	中期	102	伊居太古墳	尼崎市	92	中期
50	新稻古墳	箕面市	20	後期	103	田能遺跡(1次)第1号	尼崎市	12	前期
51	桜古墳	箕面市	-	後期	104	田能遺跡(1次)第2号	尼崎市	13	前期
52	中尾塚古墳	箕面市	-	後期	105	水堂古墳	尼崎市	80	前期
53	鶴南井古墳	箕面市	-	後期					

2 調査経過

(1) 過去の調査

勝福寺古墳は、明治20年代に建築用埴土として盛土が破壊される過程で、横穴式石室が発見され、多くの副葬品が検出されている。横穴式石室からは、画文帶神獸鏡、六鈴鏡、金環、管玉、土玉、鉄製刀剣、鉄斧、馬具、須恵器などが発見されている。

1929年(昭和4年)には、木村次男が、後円部に横穴式石室をもつ前方後円墳として紹介している(木村1929)。その後、1933年に前方部側における土取りに際して、五獣形鏡と鹿角袋



図2 勝福寺古墳周辺遺跡分布図

の刀身片が発見された。

この結果と墳丘測量成果をふまえ、梅原末治は勝福寺古墳を時期を異にする円墳2基と解釈した(梅原1935)。その主な根拠は、副葬品と埋葬施設の差異、そして前方部(南墳)側に葺石がみられるのに対し、後円部(北墳)側には認められない点である。

その後、1971年には川西市教育委員会により、墳丘各所に調査の手が入った(武藤1974a、亥野1976)。このときの調査において、前方部より両小口に粘土を用いた埋葬施設が検出され、金環、山梶子玉、鉄刀、鐵鎌が出土している。本報告では、1971年度の川西市教育委員会による調査を1次調査とする。

さらに、2000年には、大阪大学考古学研究室により墳丘測量と横穴式石室の測量を行い、その成果を報告するなかで、前方後円墳である可能性を指摘した(清家編2001)。(田中由理)

(2) 調査経過

2001年度(2・3次)

調査期間 2001年7月21日～8月16日

調査主体 川西市教育委員会・大阪大学考古学研究室

調査区 後円部北調査区 後円部西調査区 後円部西セクション 西クビレ部調査区
墳丘主軸調査区

報告書 川西市教育委員会2002「勝福寺古墳第2次調査」『平成13年度川西市発掘調査概要報告』

調査参加者 寺前直人・長友朋子・林正憲・石井智大・瀬川貴文・中村大介・福辻淳・高松雅文・和田一之輔(大阪大学大学院文学研究科院生)・安東裕世・伊藤文彦・上坂裕子・大西美緒・柏原龍嗣・河盛久美・西念佑馬・塙谷晃世・中川二美・松本史彦・向井祐介・森先一貴・横田深一郎・岩佐健司・小川智子・樺田妙・金田啓・田中由理・中村里美・望月誠子・吉田知史・渡辺今日子・越智淳平・木田好則・小林由佳・美谷吉孝・中久保辰夫・平岡瑛二・竹山智恵・氷室まゆ(同文学部学生)・大八木優(同薬学部学生)

2002年度(4・5次)

調査期間 2002年7月16日～8月17日

調査主体 川西市教育委員会・大阪大学考古学研究室

調査区 前方部西調査区 前方部南調査区 東クビレ部調査区
前方部墳頂調査区(墳丘主軸調査区) 前方部墳頂南棺調査区

報告書 川西市教育委員会2003「勝福寺古墳第4次調査」『平成14年度川西市発掘調査概要報告』

調査参加者 長友朋子(大阪大学文学研究科教務補佐員)・林正憲・中村大介・中原計・石井智

大・高松雅文・和田一之輔・中川二美・三好玄(同大学院文学研究科院生)・小川智子・樋田妙・金田啓・田中由理・中村里美・望月誠子・横田深一郎・吉田知史・渡辺今日子・越智淳平・木田好則・小林由佳・梅田直毅・河内優介・木村理恵・竹山智恵・中久保辰夫・廣藤紀子・村田肇・山田周司・渡辺弘樹・ハイリン=セイハン・平岡瑛二・西村直子・平井萌貴子・四谷麻由子・坂口真理・桧皮陽子・高橋篠子・谷口美幸(大阪大学文学部学生)・山本恭子(同法学部学生)

2003年度(6・7次)

調査期間 2003年7月22日～8月15日

調査主体 川西市教育委員会・大阪大学考古学研究室

調査区 前方部南調査区(先年度調査区拡張) 東クビレ部調査区(先年度調査区拡張) 前庭部調査区 前方部南東調査区 後円部北東調査区

調査参加者 中村大介・中原計・石井智大・和田一之輔・中川二美・三好玄・伊藤聖浩・田中由理・望月誠子・ロザンナ=チャン・渡辺今日子(大阪大学大学院文学研究科院生)・高松雅文(大学院文学研究科研究生)・東影慈(文学部研究生)・木田好則・小林由佳・越智淳平・久田祥子・吉田知史・河内優介・木村理恵・竹山智恵・中久保辰夫・廣藤紀子・村田肇・森田和幸・山田周司・穂谷有亮・小野杏子・高上拓・谷口美幸・田村美沙・平井萌貴子・前田俊雄・三好元樹・吉井奈津江・上田麻美子・門口実代・山本紘史(同文学部学生)・古谷暢也(同経済学部)・山本恭子(同法学部)・横地煦(同文学部聽講生)

(3) 謝 辞

本調査を遂行するに当たっては、勝福寺古墳住職後藤善成氏には発掘調査をご許可していただきたのみならず、現地における調査において様々な援助を与えられた。川西市教育委員会岡野慶隆氏、祭本敦士氏からは、調査に関して適宜ご指導いただくとともに、機材の貸し出しひか多大なるご協力を賜った。独立行政法人通信総合研究所門林理恵子氏、河合由紀子氏には現地説明会のインターネット上の実況中継に際してご協力いただいた。このほかにも調査作業の円滑化に関し、八坂神社には駐車場、トイレの開閉等のご協力を賜った。さらに川西市労働会館や地元火打自治会をはじめとする多くの方々から多大な援助を得た。記して感謝します。

3 墳丘の構造

(1) 調査区の設定(図3)

前章で紹介したように、2000年以降、勝福寺古墳では、後円部に5箇所、クビレ部に2箇所、前方部に3箇所、計10箇所の調査区を設定し、墳丘構造の解明を目指した。また、後円部横穴式石室羨道から前庭部にかけての部分と、後円部から前方部墳頂部および前方部墳頂南棺の調査も行っている(図3)。後の2地点については、次章で詳述する。なお、羨道から前庭部の調査成果については、2004年3月に行った調査成果を含め、改めて報告することとし、今回は割愛した。

(寺前)

(2) 後円部北調査区(図4~6)

後円部北調査区は墳丘端の位置を確認するとともに、墳丘裾部の状況を明らかにすることを目的として、墳丘主軸にはほぼ平行する位置に設定した南北7.1mの調査区である(図4)。東西幅は調査開始時には1.5mであったが、後に拡幅したため、最終的には2mとなった。

墳丘測量の段階で、調査区南端から約1.5mの位置に崖状の地形が確認されていた。そのため、墳丘に対して改変が加えられていることが想定された。掘削を進めていくと、墳丘面が地山に達するまで崖状に削平されている状況が確認できた。また、調査区南半でも表土下(第10・13層など)から瓦や陶器片が多数出土した。したがって、墳丘西斜面と同様に、墳丘北側にも大きな改変が加えられていることが明らかとなった。

掘削を進めたところ、標高57.5m付近において、円筒埴輪の基底部がほぼ樹立状態で、2箇所より検出された(図版1-3)。2箇所で検出された円筒埴輪基底部のうち、西側の埴輪を埴輪(1)、東側のそれを埴輪(2)として、以下の検討を進めることとする。両者は芯々間距離で、40cmほどはなれている。

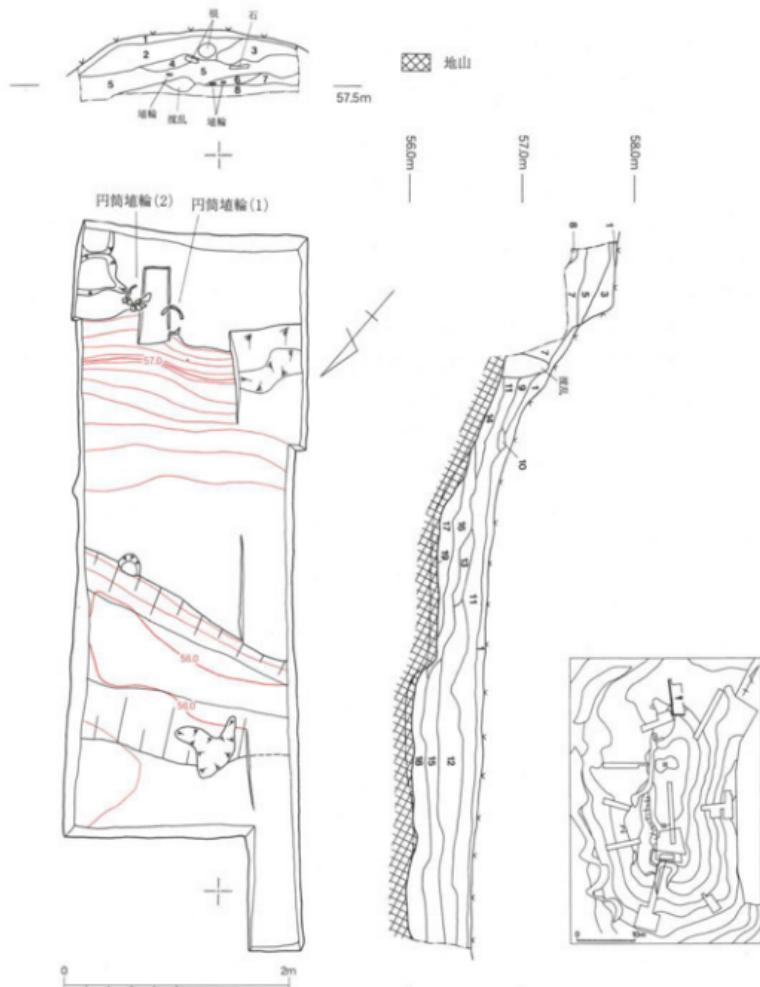
埴輪(1)は崖面際から、直径約4分の3周を残した状況で検出された。周辺を繰り返し精査したもの、掘形の検出にはいたらず、断ち割り調査においても、掘形の確認はできなかった(図5)。

埴輪(1)より南東約20cmの位置から埴輪(2)が、直径の約2分の1を残した状況で検出されている(図6)。全体が外側に開いていたが、とくに北側に傾いており、崖面側(西側)ではその傾向は顕著であった。埴輪堀形の検出を意識して、平面精査を行ったが、埴輪(1)同様、掘形の確認には至らなかった。さらに、基底部と接する黄褐色土層(図6第1層)に埴輪片が含まれていたことは重要である。

2基の埴輪はともに基底部を含む円筒埴輪片であり、いずれも半周以上が残存していたこ



図3 調査区配置図



表土	1. 2.5Y 4/3オリーブ褐 植縫粒砂～中粒砂
流土	2. 2.5Y 6/5黄褐 植縫粒砂～粗粒砂 硬を10%含む
	3. 2.5Y 6/5明黄褐 植縫粒砂～中粒砂
	4. 2.5Y 6/5明黄褐 植縫粒砂～中粒砂
	5. 10Y R 5/4にぶい黄褐 植縫粒砂～中粒砂 黄褐色土ブロック状に5%含む 埋輪を多く含む
	6. 10Y R 6/6明黄褐 植縫粒砂 埋輪を多く含む
	7. 10Y R 6/6にぶい黄褐 植縫粒砂～細粒砂
	8. 10Y R 6/6明黄褐 植縫粒砂～細粒砂 埴輪底部を含む
	9. 2.5Y 4/3オリーブ褐 植縫粒砂
	10. 2.5Y 6/4にぶい黄褐 植縫粒砂～中粒砂
	11. 2.5Y 5/2稍灰黒 植縫粒砂～細粒砂 瓦を含む
	12. 2.5Y 4/6オリーブ褐 細粒砂
	13. 2.5Y 6/4にぶい黄褐 埋輪粒砂～中粒砂
	14. 10Y R 5/4にぶい黄褐 埋輪粒砂～中粒砂
	15. 10Y R 5/6黄褐 シルト～植縫粒砂 埋輪を含む
	16. 10Y R 6/6明黄褐 シルト～細粒砂
	17. 2.5Y 6/4にぶい黄褐 シルト～細粒砂
	18. 地溝状構造埋土
	19. 2.5Y 6/6明黄褐 シルト～細粒砂 埴輪のみ含む
地山	20. 地山 黄褐色土に2.5Y 7/4浅黄褐 黄土を40%含む

図4 後円部北調査区平面図・断面図

とから、墳山当初は埴輪焼造時の樹立位置を保っている埴輪であると想定していた。しかしながら①埴輪の堀形が検出できなかった点、②基底部を含む土層より埴輪片がわずかながら出土している点、③いずれの基底部も全周しない点、を重視するならば、両者は流土中に含まれたと判断することができよう。

遺構および遺物のありかたを重視するかぎり、2基の円筒埴輪基底部(図5・6)は、流土中より検出されたと判断できる。ただし、両者の埴輪を結ぶ直線と、後述する崖面下において検出された古墳周溝の可能性がある溝状遺構が、ほぼ平行している点には注意が必要である。テラス上の盛土が流出していたとしても、2基の埴輪の検出位置は、本来の埴輪列の配置をある程度反映した状況である可能性がある。

調査区南端より2.5m北の地点では溝状の遺構が検出された。この遺構に関しても後世の改変による可能性が想定されたが、溝内の地山直上から埴輪片が数点出土した。これらの埴輪片を含む溝状遺構直上の土層(第18層)は、瓦や陶磁器片を含む土層(第9~17層)よりも下層に位置しているため、比較的早い段階で堆積した埴丘流土と判断することができる。したがって、後世の攪乱が地山周辺まで達していないことから、この溝状遺構は古墳に伴う可能性が高いといえる。おそらく埴丘を画するために設けられた遺構と想定できよう。

なお、この調査区から出土した遺物は平坦面上の埴輪のほかに、埴丘流土中から多数の円筒埴輪片と形象埴輪片が数点出土している。

(寺前・林正憲)

(3) 後円部北東調査区(図7)

後円部北東調査区は埴丘裾と後円部北調査区において検出された埴丘裾の溝状遺構および埴丘テラス面の確認を目的として、2003年度に後円部北側に設定された調査区である。調査区は主軸をほぼ南北とし、規模は長さ9.7m、幅1mである。

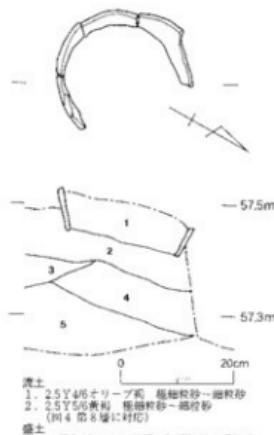


図5 後円部北調査区円筒埴輪(1)
出土状況図

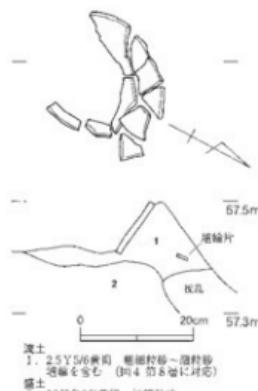


図6 後円部北調査区円筒埴輪(2)
出土状況図

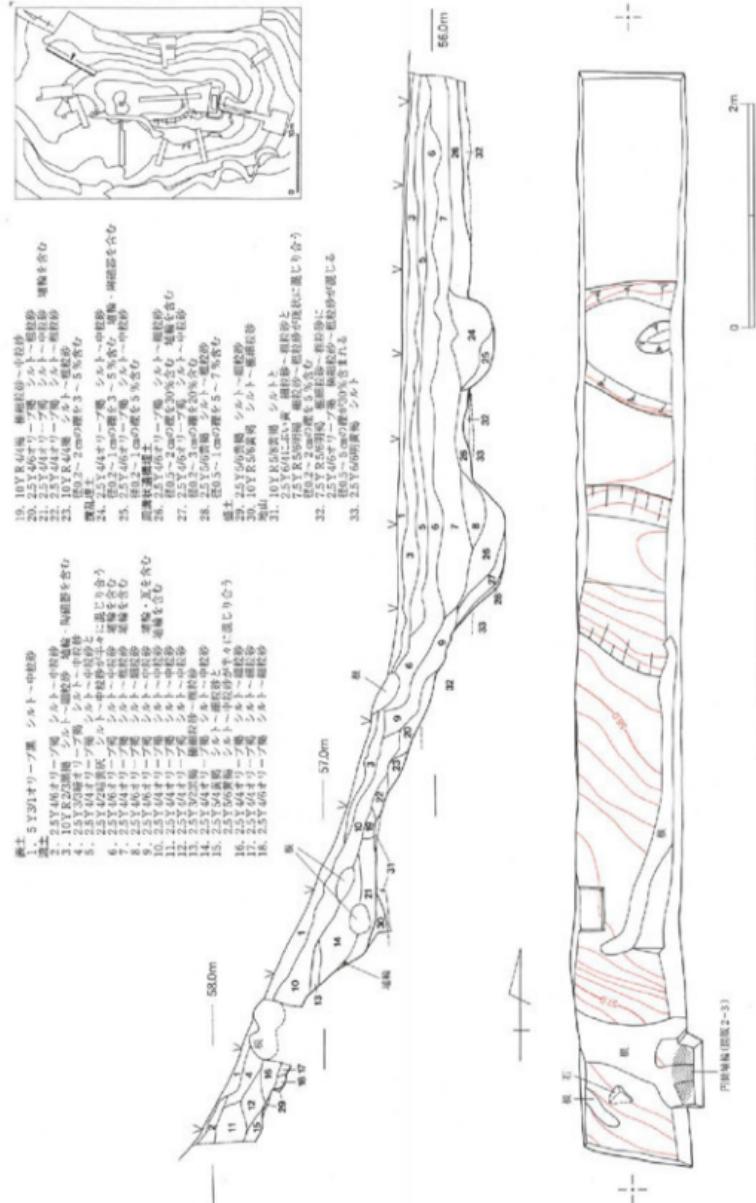


図7 後円部北東調査区平面図・断面図

現地表面において平坦となっている部分の掘削を行ったところ、標高55.8m付近で落ち込みが検出された。落ち込みの長軸は調査区に直交しており溝状を呈するが、西壁付近ではかなり幅を減じており、溝というよりは土壌に近いものの可能性がある。落ち込みの幅は最大で約1.2m、深さは約0.4mである。底は平坦ではなく、やや凹凸が認められる。この落ち込みは埋土中から近世の瓦や陶磁器が検出されていることと、埴輪片を包含する礫混じりの層(第26層)の上から掘り込まれていることから見て古墳に伴う遺構ではないと判断される。内部からは瓦・陶磁器と埴輪の破片が少量出土したのみであり、遺構の性格は不明である。

次に、墳丘の裾においては標高55.7m付近で調査区と直交する溝状の遺構が検出された。この溝状遺構(図版2-2)は幅約1.1m、深さ約0.3mである。地山を掘り込んで造られており、南側の立ち上がりはそのまま墳丘へとつながっていく。埋土からは埴輪片が検出されたが、古墳時代より新しい時期の遺物は全く検出されなかった。こうした点からみて、この溝状遺構は墳丘を区画するための溝であると考えられる。

墳丘部分においては、標高56.5m付近までは地山を成形して墳丘を造っていることが確認された。それより高い部分においては盛土を積んで墳丘を造っている。地山と盛土の境となる部分においては幅約1.2mほどの平坦な面が検出された。この平坦面の直上の土層は太い根によって大きく搅乱を受けていたが、埴輪片を少量含むほかは時期の下る遺物は含んでいなかった。また、この平坦面がちょうど地山と盛土の境に形成されていることなども考えると、この平坦面は古墳築造時に形成されていた墳丘テラスである可能性が高い。後円部北調査区において検出された墳丘テラスとは1mほどのレベル差があるが、この点に関しても先述のように墳丘全体が東に向かって傾いていることから、テラス自体も東に向いて築造された可能性を指摘しておきたい。なお、この墳丘テラスからは原位置を保った埴輪は検出されなかつた。

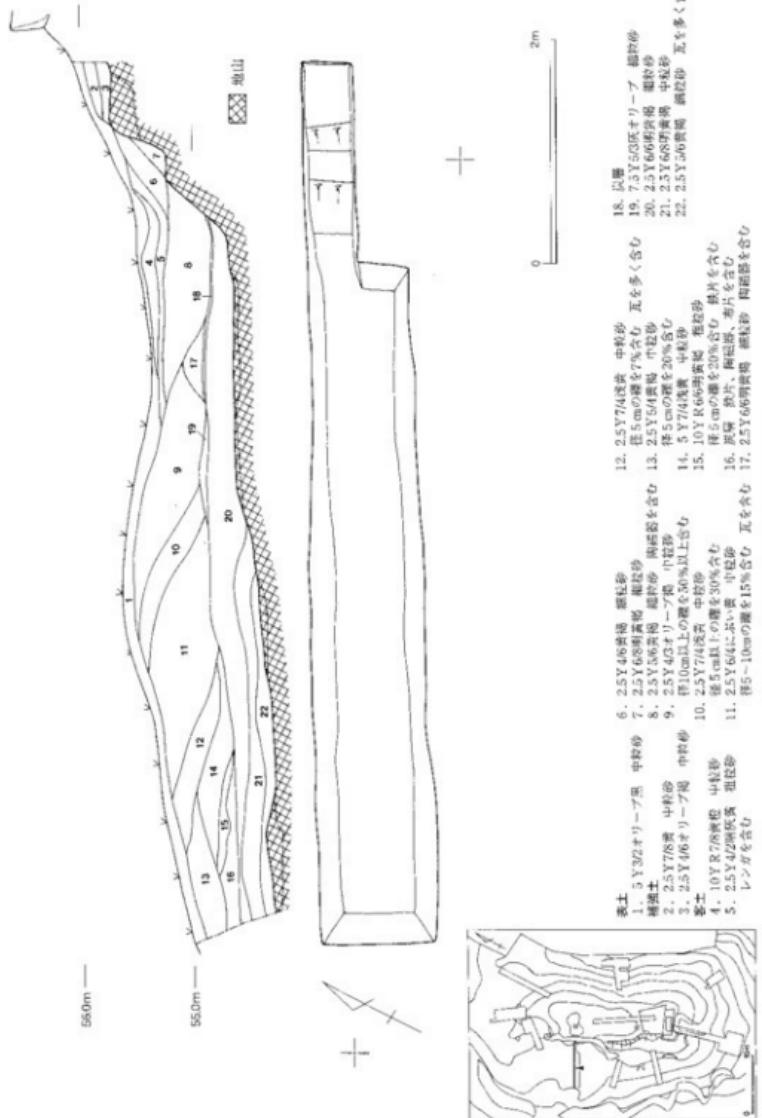
以上のように、この調査区においては後円部北調査区で検出されたものとの連続性が考えられる溝状遺構と墳丘テラスが確認され、墳丘形状の復元に重要な手がかりを得ることができた。

(石井智大)

(4) 後円部西調査区(図8)

後円部の西側は近代以降の採土のために大きく破壊されている。現地表面下での墳丘の残存の有無を確認するため、後円部西調査区を設定した。調査区は、まず後円部の西側に墳丘主軸に直交して長さ6.0m、幅1.0mで設定し、さらに後円部西端セクションに向かって長さ1.9m、幅0.4mの拡張を行った。

調査区東半では、標高55.7m付近で地山を検出した。この高さは石室床面とほぼ同じレベルである。その上面の2層(第2・3層)には近代の遺物が含まれておらず、1971年度の川西



市教育委員会調査時に施された補強土と考えられる。

調査区東端より西へ1～2mにかけて、段状に急激な地山面の落ち込みが認められ、それより西側になると地山上面は、標高54.6mから54.3mで段差なく緩やかに下がっている状態が確認された。地山より上の土層は近代の遺物を含むため、採土後の堆積土であると考えられる。遺物は、陶磁器や瓦を中心とする近代以降の遺物のほか、耕土中から須恵器の坏身または坏蓋口縁部の細片が1点出土している。埴輪の出土は見られなかった。

(長友朋子・望月誠子)

(5) 後円部西セクション(図9)

後円部西セクションは、近代以降の壁土採取によってできた崖面で、ほぼ垂直な崖面を呈している。採土によって後円部のほぼ西側半分は失われ、横穴式石室の西側壁の石材裏面が露出している。後円部西セクションは、後円部の墳丘築造方法、石室構築と墳丘築造の関係の把握を目的として設定した南北11.7m(a-b間9.8m、b-c間3.0m、見通しではa-b間9.8m、b-c間1.9m)、高さ4.1mの調査区である。調査に際しては、安全面を考慮して崖面の清掃を行い、土層の観察を行った。

後円部西セクションは北方向に開口する横穴式石室には沿った崖面であるが、南端では南西方向へ屈曲している(図9)。調査時は基準点a-b、b-c間においてそれぞれ主軸を設定し土層図を作成した。本報告では石室構築と墳丘築造の関係を明瞭に示すために、石室主軸S₂-S₃に平行する主軸を設定して崖面を図化した。したがって、基準点b-c間において斜方向からの見通しとなるが、全体としては石室主軸と崖面土層断面が平行に対応している。なお、1971年の調査において石室の補強を目的として崖面の下端に客土が盛られている。その範囲は基準杭bから北へ1.9m付近から基準杭aまで及んでいた。客土については現状のまま維持し、崖面の調査を行った。

後円部西セクションでは、崖面南端付近で灰白色シルトの第29・30層が標高56.1～56.8mで確認できた。これらの層は地山と考えられる。そして第29層は石室側へ傾斜していることが観察できる。各調査区において確認された地山の標高は、後円部北調査区で標高57.4m、後円部西調査区で標高55.7mとなっている。各調査区の成果から、地山は玄室付近で凹地を呈していることが判明する。この凹地は第29層の傾斜がかなりの角度であることから自然地形とは考えにくい。よって横穴式石室構築のためにまず地山を掘り込んだものと考えられる。そして第29層の石室側への傾斜は、凹地の立ち上がりを反映したものと考えられる。

西セクション南端では第29・30層よりも石室側で第28・27層が観察された。第28層はにぶい黄褐色の細粒砂、27層は明褐色の細粒砂から中粒砂で構成されている。第28・27層の上面は、標高56.4m・56.8mで、厚さはそれぞれ30cmほどで水平に堆積している。横穴式石室との対応

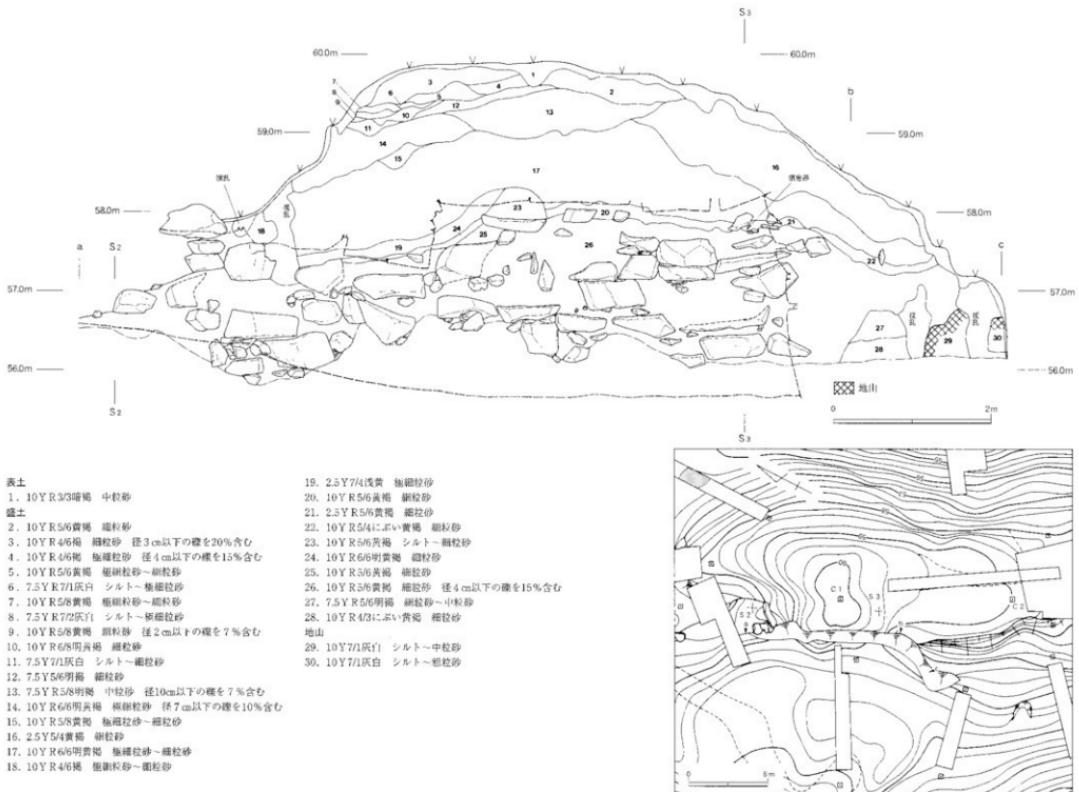


図9 後円部西セクション見通し図

関係をみてみると、玄室1段目の上端が標高56.3~56.4mで第28層と、2段目上端が56.7~57.0mで第27層とそれぞれ対応する高さであることが判明する。第28・27層は石室1・2段目の段積みに対応する裏込めの可能性を考えられる。ただし、崖面南端は弧状を呈し、玄室南西隅より南西へ0.8~1.8mで第28・27層が確認されたため、奥壁・玄室西側壁いずれに対応するかは明確ではない。また、後述する第26層が第28・27層より石室側で確認されており、関連しない可能性も考えられる。ここでは、奥壁もしくは玄室西側壁の壁面構築に対応する裏込めの可能性をあげるにとどめておきたい。

そして標高56.0~58.0mにかけては黄褐色細粒砂の第26層が認められた。石室の壁面構築に伴う裏込めと考えられる。石室の構築には複数の工程が想定され、各段を積み上げるたびに裏込めが施されたと考えられる。本来なら、石室の各段に対応する裏込めが確認できると考えられるが、長年の風雨による崖面の風化が激しかったため確認できなかった。なお、第26層は礫を多く含むことを特徴とする。なかには拳大から人頭大の石材も認められる。これらの石材は、第26層より上層ではほとんど認められなかった。これらには石室壁面を構成する大型の石材と石材の咬み合わせを良くし、壁面の安定化を意図して設置された石材も存在すると考えられる。

第26層の上層では、厚さ10~20cm程度の薄い層が崖面の北側から南側まで全体を覆っていることが認められる(第19~24層)。これらの層は、黄褐色系細粒砂を中心とし、崖面南側では標高57.2~58.0m付近、中央では57.7~58.3m付近、北側では57.3~58.3m付近にみられる。中央ではほぼ水平に堆積しているが、南側・北側ではともに玄室にむかって高くなっている。この第19~24層は、石室の天井石を覆うように形成されていた可能性と、側壁・奥壁の最上段付近で形成されていた可能性が考えられる。石室断面との対応関係をみてみると、玄室天井の標高58.1mよりもやや低い位置でこれらの層が確認されている。崖面は石室西壁面の石材が露出するほど接近していることから、後者の可能性が高いと考えられる。そして後者の場合は、天井石架構前に一旦崖面の裏込め土を整えた可能性と、天井石架構後に天井石と側壁の間などに施した可能性が考えられる。

第19~24層の上面には第13~18層が認められ、石室天井石を架構したのちに施されたと考えられる。第17層は崖面の南側から北側まで及び、標高57.3~59.2mにかけて確認できる。第17層に関しては、大きく上下2層に分かれる可能性があったが、長年の風雨による崖面の風化や調査の安全面から細分には至らなかった。第17層の上面には第13~16層が、崖面全体に認められた。第16層は黄褐色の細粒砂、第14層は明黄褐色の極細粒砂、第13層は明褐色の中粒砂である。第13層は粒度が荒く、礫も多く含まれており、長径10cmの礫も認められた。

第13~17層の上位には、標高59.0~59.7mにおいて厚さ5~20cm程度の単位からなる第4~12層が認められる。第13~17層は大きな単位で盛土を施しているのに対して、第4~12層では

細かな単位によって盛土を施している。特に第6～11層は細かく、第6層は厚さ5cm、幅50cmとなっている。また第4～12層では黄褐色系と灰白色系の異なる盛土を交互に用いており、互層を呈している。第6・8・11層は灰白色系のシルトから極細粒砂、第4・5・7・9・10・12層は黄褐色系の極細粒砂から細粒砂が盛土の中心となっている。灰白色系の盛土のほうがやや細かい土質が選択されている。

そしてこの互層の上位には、第2・3層が確認されている。厚さは30～40cm、幅2mで、第4～12層よりもやや大きな単位となっている。第2層は黄褐色の細粒砂、第3層は褐色の細粒砂を用いて盛土を行っている。

後円部西セクションで確認された土層の全体的な特徴としては、黄褐色系の極細粒砂から細粒砂が用いられている。そして礫を多く含んでいることも特徴としてあげられる。また、第4～12層の互層では灰白色系のシルトが用いられていた。後円部西セクションの盛土では第4～12層を除けば、特に選択性が認められないといえる。

各土層の堆積方向に関しては水平が基本で、石室との関係上、北側では北へ、南側では南へ傾いている。流土と明確に判断される土層は確認できなかった。かなりの削平が進んでいると考えられる。

出土遺物としては、第21層より須恵器片が出土した。また、1971年調査後の石室補強の目的として積まれた客土(基準点bより北へ3.8m付近)より須恵器片が出土した。 (高松雅文)

(6) 東クビレ部調査区(図10・11)

墳丘東側において後円部と前方部の接する部分、すなわちクビレ部を確認するために設定した調査区である。2002年度と2003年度に調査を行った。2002年度の調査では南北2m、東西2.5mの調査区を設定し、その後、盛土の確認のため墳丘側(西側)に幅1mで東西に1.5mの拡張を行った。さらに墳丘裾を確認するため墳裾側(東側)に南北1m東西90cmの拡張を行った。結果として「凸」状の調査区となった。

2002年度の調査(図版4-3)では、表土(第1層)および流土(第4・9層)を30cmほど掘り下げたところで、調査区の墳裾側において流土直下に東に向かって下る地山を検出した。しかし、地山の傾斜面に明瞭な角度の屈曲は認められず墳裾は未確定であった。一方、調査区の墳丘側の一部では流土(第4・9層)直下において遺物を包含しない第17層を確認した。この第17層の性格を確認するため西側に拡張したところ、第17層の直上に遺物を包含しない層をもう1層検出した(第16層)。この第16層と第17層は遺物を包含しない点と非常に均質な層であることを考慮して、盛土であると判断した。

2003年度の調査(図版4-2)では、先年度確認できなかった墳裾の検出を目指し、先年度の東拡張区を南北に拡張し、東西1m南北5mの調査区を設定した。その後、西側に幅40cmで南

北に2m拡張し、東側には幅30cmで南北に4mの拡張を行った。

まず、表土および流土(第10~13層)を掘り下げたところ、地山を検出した。地山は東に向かって傾斜が下がっていき、調査区の東端、標高52.1m付近で傾斜が緩やかになり平坦に近くなることが確認された。この地山の傾斜変換点に加えて、調査区東端では流土の堆積状況が現

表土

1. 10YR 3/1黒褐色 粗粒砂～粗粘砂
通勤・瓦・近世遺物を含む
2. 2.5YR 3/3オリーブ褐色
シルト～粗粒砂
3. 10YR 4/4褐色 シルト～中粒砂
4. 10YR 5/5黄褐色 シルト～中粒砂
通勤
5. 10YR 4/6褐色 シルト～中粒砂
6. 10YR 4/6褐色 シルト～中粒砂
7. 10YR 5/6黄褐色 シルト～中粒砂
8. 10YR 5/6黄褐色 シルト～中粒砂
9. 10YR 5/6黄褐色 シルト～中粒砂
通勤
10. 10YR 5/6黄褐色 シルト～中粒砂
通勤・須恵器・近世遺物を含む
11. 10YR 7/8黄褐色 シルト～中粒砂
通勤・須恵器を多量に含む
12. 10YR 4/3/1灰い黄褐色
13. 7.5YR 4/4褐色 シルト～中粒砂
通勤・須恵器を含む
14. 5YR 4/4に灰い赤褐色 シルト～中粒砂
通勤・須恵器を多量に含む
15. 10YR 5/6黄褐色 シルト～中粒砂
土5~20cmの縦を10%含む
通勤を含む
- 盛土
16. 10YR 5/8黄褐色 シルト～中粒砂
17. 10YR 5/8黄褐色 シルト～中粒砂
縦0.5~1cmの縦を1%含む

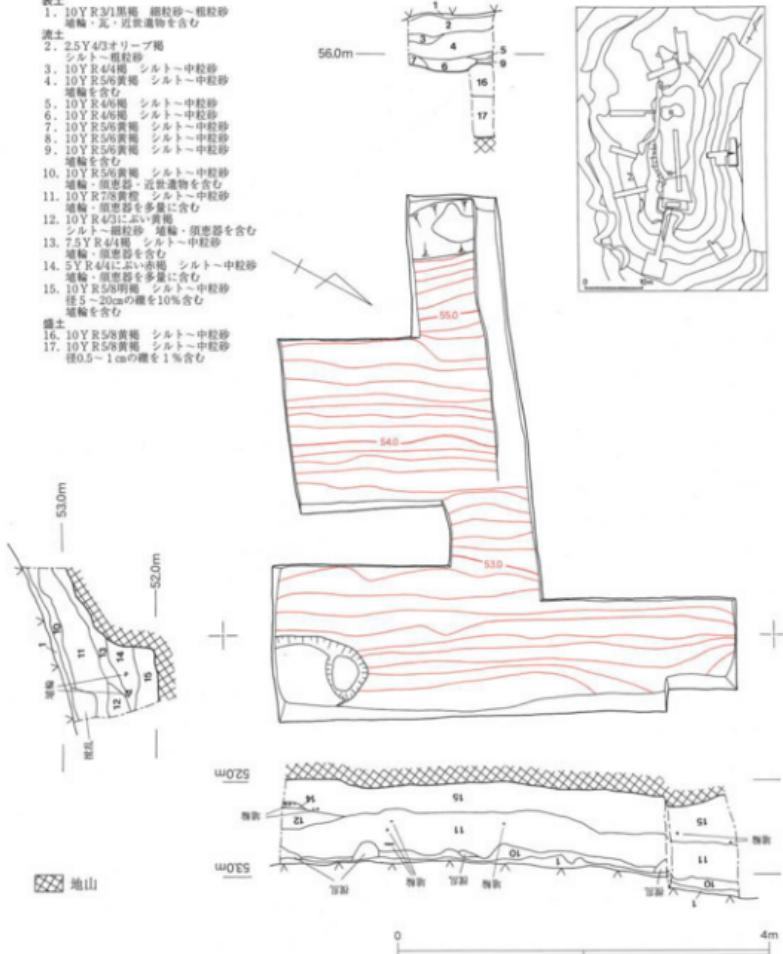
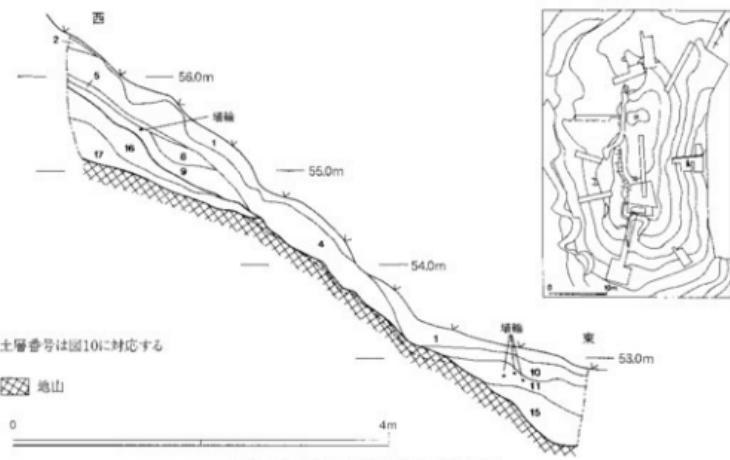


図10 東クビレ部調査区平面図・断面図



地表面の斜面に比べて水平に近くなること、さらに調査区東端でより多くの遺物が出土するというような状況を総合的に判断すると、調査区東端付近が墳丘裾に近い位置にあたると推定できる。しかし、これ以上東側への拡張ができなかったため、墳丘裾であるという確証は得られなかった。なお、本調査区のコンターラインをみるとクビレをなすような屈曲は認められず、直線的に伸びていることがわかる。したがって、このコンターラインを墳丘全体のなかで考えると、前方部の直線的なラインと合致するものと理解できる。

調査区南東隅においては第12・13層を掘削して第14層を検出する過程で、地山が落ち込んでいくことが確認され、土坑状の遺構が存在することがわかった。この土坑を掘り下げたところ、土坑は地山をほぼ垂直に50cm掘り込んでいることが確認された。第14層からは多量の埴輪片と須恵器片が出土した。なお、本調査区では葺石や段築は確認できなかった。ただし、地山には20cm程度の礫が含まれる。このような状況は後述する前方部南調査区でも認められる特徴であり、一見葺石状を呈する。遺物は器台・高壺などの須恵器片と円筒埴輪片・形象埴輪片が多量に出土した。

(和田一之輔・東影悠)

(7) 西クビレ部調査区(図12)

本調査区は、墳丘盛土および墳丘西側の後円部から前方部への変換点を確認することを目的として設定された調査区である。長さ5.0m、幅1.0mで長軸を東西方向にとる。

調査区東側では標高55.4m、西側では標高54.5m付近で地山面に達し、その直上の第16層などから近代の瓦などが出土している。墳丘盛土など古墳にともなうと考えられる土層は本調

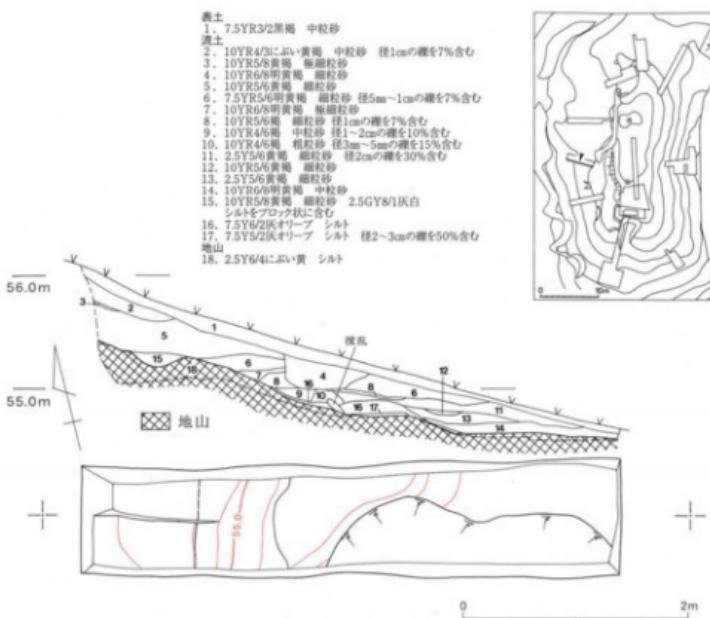


図12 西クビレ部調査区平面図・断面図

査区では確認されていない。後円部西調査区と同様に近代以降の土取による削平を受けているものと考えられる。また、地山面は調査区東端から1m付近で傾斜の変化が認められたが、現状からはこれが墳體であるという積極的な根拠はない。

なお、本調査区からは近代の瓦が多数出土したが、古墳時代に属する遺物は須恵器の小片のみであり埴輪は検出されなかった。
 (中川二美)

(8) 前方部南調査区(図13~15)

前方部南調査区は、前方部墳丘裾を確認するために、前方部南端中央に設定した調査区である。前方部は1933年の採掘により大規模な攪乱を受けている(亥野1976)。2002年度はこの攪乱坑を利用し、墳丘主軸に平行して南北方向に長さ12.0m、幅1.0mに調査区を設定した。ただし、調査区北端では、壁面観察が可能な幅3.5m、高さ1.5mの範囲を調査区北壁としている。また、墳丘裾の確認のため、調査区南端では西側に長さ3.2m、幅1.5mの拡張を行った。さらに、墳丘裾を確定するため、2003年度は2002年度の調査区を南側に長さ0.8m、幅4.0m、東側に長さ3.0m、幅1.5mの範囲で拡張した。その結果、前方部南調査区は図13で示される形を呈

している。

調査区北端より8.5m以南では、現地表下20~50cmにあたる標高54.5m~52.9mで地山を検出したが、表土と地山の間は流土によって占められており、盛土はみとめられなかった。地山は拳大の礫を多く含む黄褐色の極細粒砂シルト(第122層)が南に傾斜しながら一面に広がっている。その下層に明褐色で大きな礫を含まない地山(第123層)と、さらに下層で赤褐色で礫を多く含む地山(第124層)が検出された。北端から南に11~12mにおいて、調査区の広い範囲にわたり緩斜面が検出され、特に調査区南部の東側で明瞭である。この調査区南東部には落ちこみがみられ、落ち込みの範囲では緩斜面にそって旧表土(第22層)が残存している。旧表土より上層では近現代の遺物が出土するが、旧表土より下層では新しい時代の遺物は皆無であり、埴輪片が集中して出土している。したがって、こうした地山の傾斜角度の変化は古墳築造にともなうものと考えられ、この傾斜変換点が前方部墳丘裾にあたると判断した。

また、墳丘裾より南側で地山(第123層)を掘り込んだ土坑を1基検出した。この土坑内からも埴輪片のみが出土しており、古墳築造後比較的早い段階で掘りこまれた可能性が高い。

遺物は、近現代の遺物のほか、須恵器と埴輪が出土している。須恵器は調査区中央部の掘削内から壺蓋片1点、南部の根掘乱内から壺片1点、北端の川西市教育委員会旧調査区埋め戻し土から壺体部片1点、壺蓋と思われる破片1点が出土している。埴輪は調査区南東隅の落ちこみ内と土坑内から集中して出土した。全て旧表土(第22層)下からの出土である。細片が多く調整等は不明であるが、突帯片が1点、形象埴輪の一部とみられる埴輪片が1点出土している。これまで前方部から埴輪の確実な出土例はなく、表面採取されたことがあるのみ(亥野1976)であったが、今回の調査により前方部にも埴輪が存在していたことが明らかとなった。

なお、1971年度の川西市教育委員会の調査において、前方部にあたる部分で葺石らしい拳大の礫が存在した(亥野1976)との報告があるが、今回の調査においては葺石の存在はみとめられなかった。調査区南側に広がる地山(第122層)は径5~15cmの拳大の礫を多く含み、中には径20cmの礫も存在する。この多数の礫によって構成される地山層を葺石と誤認した可能性が高い。

(望月誠子)

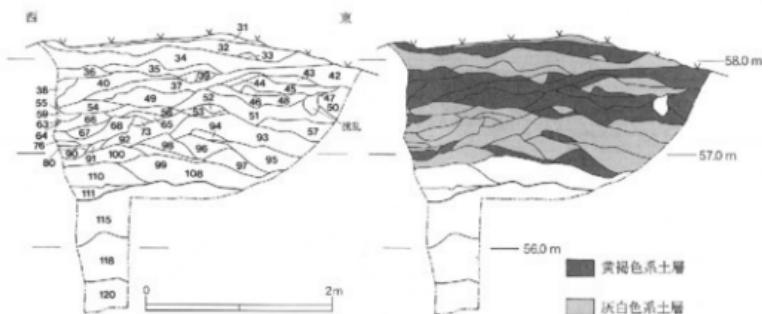
(9) 前方部南東調査区(図16)

前方部南東調査区は、前方部の墳丘裾を確認することを目的として設定した調査区である。調査区は長さ3.1m、幅1.5mで設定し、後に墳丘側に長さ0.8m、幅0.5mの拡張区を設けた。

当調査区では、標高54.5~53.1mで地山(第10・11層)を検出したが、墳丘裾と考えられるような傾斜変換点は確認されなかった。前方部南調査区で確認された墳丘裾のラインから推定すると、墳丘裾は調査区外のさらに東にある可能性が高い。また、拡張区では、標高54.5m付近において地山を平坦に成形した後、盛土が施されているのが確認された。盛土は、



図13 前方部南調査区平面図・断面図



土壌

31. 2.5Y7/2灰黒 シルト～堆積粘土に
10YR5/6黄褐 シルト～堆積粘土
を斑状に含む
32. 2.5Y6/8明黃褐 粘粒砂～中粒砂
径3cm以下の礫を10%含む
33. 2.5Y7/1灰白 シルト～堆積粘土
35. 5Y7/2灰白 10YR5/6明黃褐 シルト～堆積粘砂
を斑状に含む
37. 2.5Y7/1灰白 シルト～堆積粘砂
39. 7.5Y7/8明黃褐 粘粒砂～中粒砂
40. 7.5Y7/6灰 黏粒砂～中粒砂に
10YR5/1灰黒 粘粒砂～中粒砂を斑状
に含む、径4cm以下の礫を7%含む
42. 5Y7/6黄 粘粒砂～細粒砂に
10YR4/6灰 黏粒砂～細粒砂を斑状
に含む、径4cm以下の礫を10%含む
43. 5Y7/2灰白 シルト～堆積粘砂に
10YR6/6明黃褐 シルト～堆積粘砂を
斑状に含む
44. 5Y7/1灰白 シルト～堆積粘砂に
10YR6/8明黃褐 シルト～堆積粘砂を
斑状に含む
45. 5Y7/1灰白 シルト～堆積粘砂に
7.5YR6/8灰 黏粒砂～細粒砂を斑状
に含む
46. 2.5Y7/6明黃褐 堆積粘砂～細粒砂に
5Y7/2灰白 シルト～堆積粘砂を斑状
に含む
47. 2.5Y7/6明黃褐 堆積粘砂～細粒砂に
5Y7/2灰白 シルト～堆積粘砂を斑状
に含む
48. 5Y7/4浅黄 黏粒砂～細粒砂に
10YR6/6明黃褐 堆積粘砂～細粒砂を
斑状に含む
49. 7.5YR6/8灰 黏粒砂～中粒砂に
10YR4/6灰 黏粒砂～中粒砂を斑状
に含む、径3cm以下の礫を10%含む
50. 5YR5/6明赤褐 黏粒砂～中粒砂に
10YR7/6明黃褐 粘粒砂～中粒砂を斑状
に含む
92. 10YR6/1灰灰 細粒砂～中粒砂
径3cm以下の礫を10%含む
93. 5Y7/1灰白 黏粒砂～中粒砂に
5Y7/4浅黄 黏粒砂～中粒砂を
斑状に含む
94. 5Y7/1灰白 黏粒砂～中粒砂に
5Y7/4浅黄 黏粒砂～中粒砂を
斑状に含む
95. 5Y7/1灰白 黏粒砂～中粒砂に
5Y7/4浅黄 黏粒砂～中粒砂を
斑状に含む
96. 5Y6/1灰 黏粒砂～細粒砂
径2cm以下の礫を10%含む
97. 2.5Y7/6明黃褐 細粒砂～中粒砂
98. 5Y7/1灰白 堆積粘砂～細粒砂に
2.5Y6/1灰 黒シルト～堆積粘砂を
斑状に含む
99. 5Y7/4浅黄 黏粒砂～中粒砂に
2.5Y6/6明黃褐 細粒砂～中粒砂を
斑状に含む
108. 5Y7/2灰白 堆積粘砂～細粒砂に
5Y5/1灰 シルト～堆積粘砂を
斑状に含む

※1. 34. 36. 38. 55. 59. 63. 64. 66.
68. 76. 80. 90. 100. 110. 111. 115.
118. 120は図13に記載の土壌番号に対応

図14 前方部南調査区北壁断面図

やや質の異なる黄褐色系の上が、厚さ5~10cmの単位で互層(第5~9層)を形成しながらは
ば水平に地山の上に施されていた。遺物は、流土(第4層)中より、緑色凝灰岩製の管玉が一
点検出されたのみであり、埴輪、須恵器の出土は認められない。また、葺石も確認できなかっ
た。

(渡辺今日子)

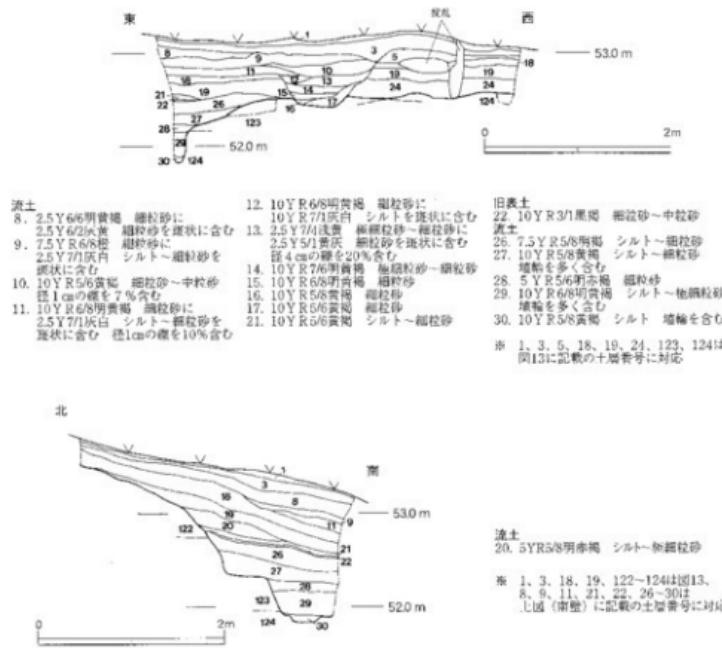


図15 前方部南調査区南壁・東壁断面図

(10) 前方部西調査区(図17)

前方部西調査区は前方部西側における盛土の残存状況と埴垣標を明らかにすることを目的として設定された、長さ7.0m、幅1.2mの調査区である。

調査区を掘り下がったところ、調査区の東端から西に1mの範囲までは標高55.9~57.0mほどで黄色系の層位(第2~4層)を検出した。これらの層は前方部南調査区で検出された盛土と類似しており、標高も齟齬をきたさないことから、墳丘盛土と判断した。しかし、それよりも西側では、標高53.5~55.9mで盛土とは土質が異なる層(第9~13層)が検出された。これらの層は土質が均質であり、遺物も出土しないことから地山と判断した。盛土と地山との境界の標高は、標高55.9~56.5mであり、前方部南調査区における境界の標高とほぼ一致する。

以上のことから、前方部西側の埴丘は、後凹部西調査区、西クビレ部調査区と同様に、近

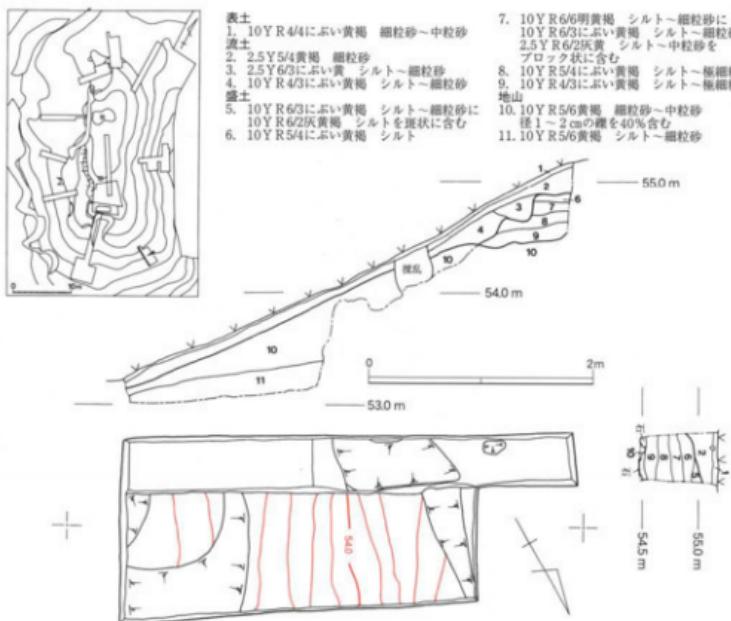


図16 前方部南東調査区平面図・断面図

代以降の壁土採取(武藤1974)により大幅に削平を被っていることが確認された。出土遺物としては、表土や攪乱土内から埴輪片が2点、土師器片が1点ある。いずれも細片であり、詳細は不明である。本調査区では、出土遺物は非常に少量であり、上記のもの以外には近現代の遺物が数点出土した程度である。

(中原計)

4 墳頂部および埋葬施設の構造

(1) 墳頂調査区(図18・19)

墳頂調査区は2001年度、2002年度にわたって調査し、1971年に川西市によって調査された墳頂トレンチ(以下川西旧トレントと呼称する)を再掘削するかたちで調査を進めた。両年度あわせて南北約13mに及ぶ調査区となっている。2001年度は川西旧トレントに重ねて、南北に長さ約11m、幅約80cmの調査区を設けた。調査区北端から南に1.2～4mほどの部分と

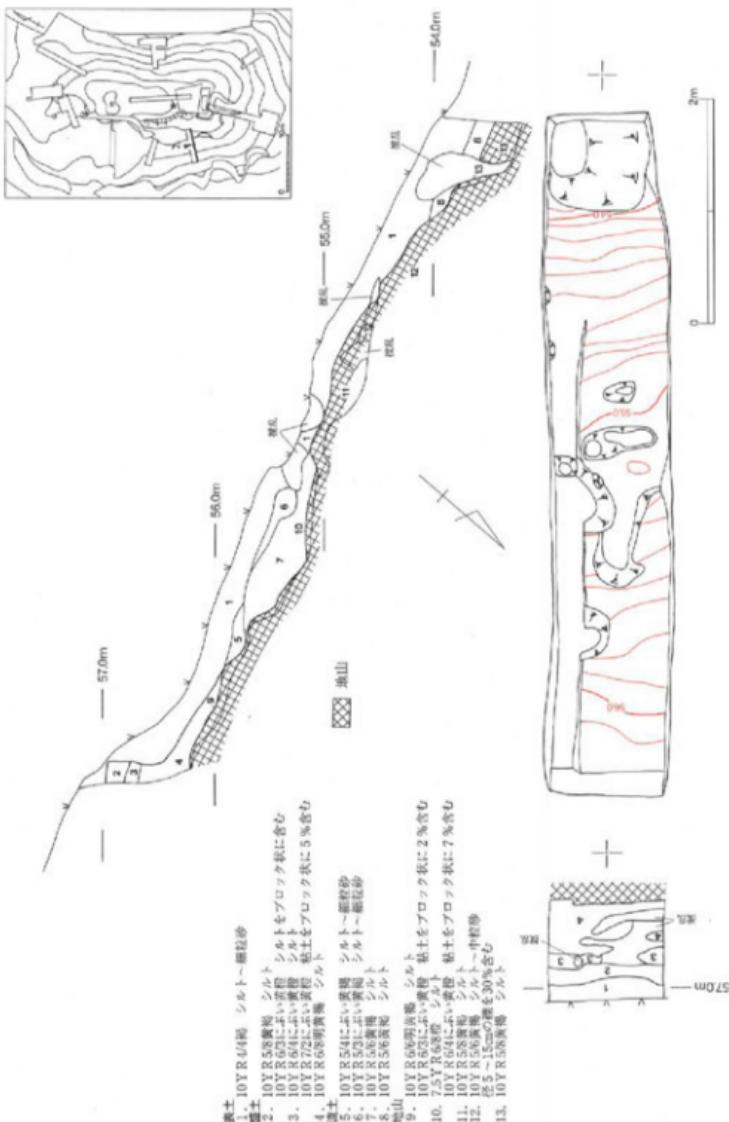


図17 前方部西溝査区 平面図・断面図

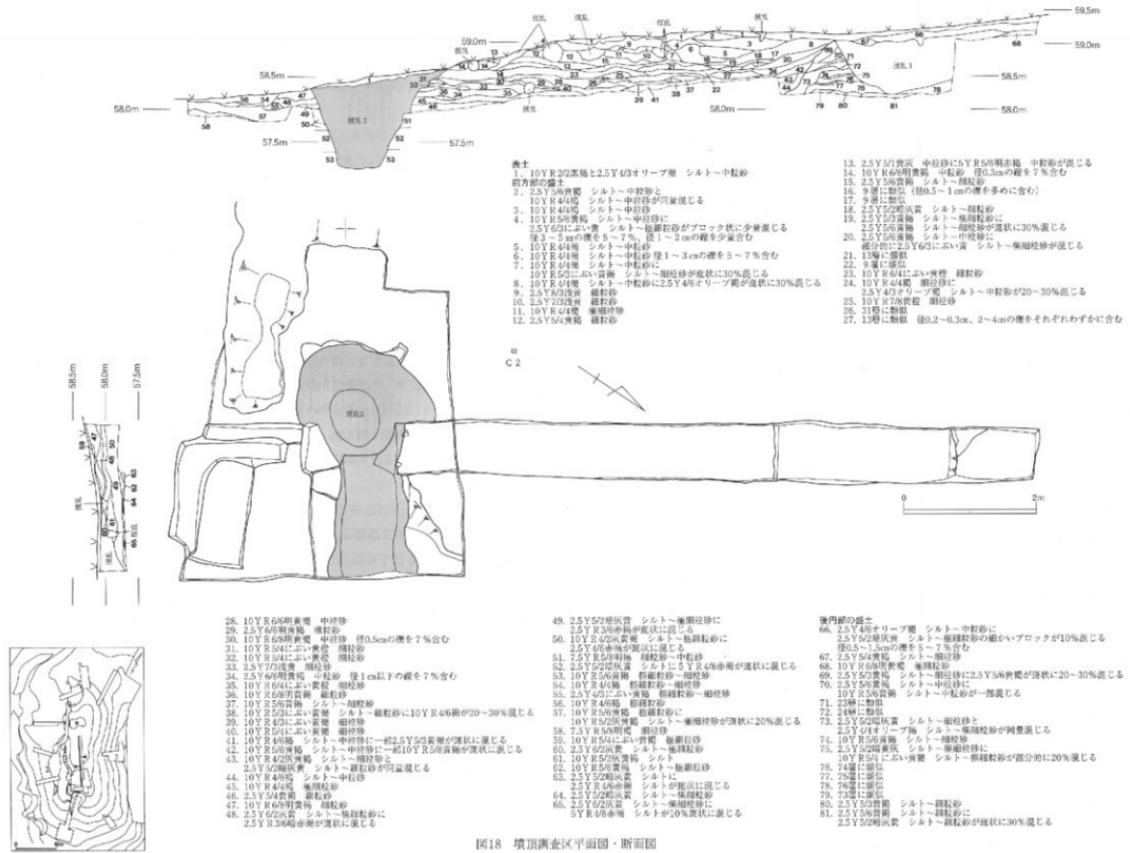


図18 填頂調査区平面図・断面図

8 m～南端の部分のみ川西旧トレンチの掘削終了面まで達したが、その他の部分については任意の深度でとどめた。そして、その調査の折、調査区南端近くに幅2 mほどの土坑状の土層を確認したため、鏡などの出土した埋葬施設の可能性を考え、その地点を中心に翌年(2002年度)に南北2 m、東西5.5 mの調査区を設定し、調査を再開した。

これらの調査の目的は、2001年度においては円墳2基が連接した形であるのか(梅原1935、武藤1974)、前方後円墳であるのかどうか(木村1929)を確認することであり、2002年度においては以前に鏡と鹿角装大刀が出土したという場所に埋葬施設が存在するかどうかの確認である。そこで2001・2002年度の調査から作成した図18をもとに記述を進める。

調査区北端より3.5 m～4.5 mの盛土の様子(図19)については2000年度に作成した墳丘測量図からも明らかのように、円墳2基ならばその連接部分に、前方後円墳ならば前方部と後円部の境、すなわち鞍部にあたると考えられる。そして土層観察の結果、北端より3.5 mのあたりから南に向かって急激に下方へ傾斜する盛土がみられた。東壁においても同様な盛土の傾斜が確認される。

円墳が2つ並ぶという梅原末治以来の見解に立てば、円墳と円墳の間には下方へ傾斜したあと、再び上方へ立ちあがっていくという溝状の土層が確認できるはずであるが、今回の調査ではそのような盛土は確認できなかった。したがって、横穴式石室のある墳丘(後円部)から南に向かって下方へ傾斜する土層の存在から、先に後円部を築造した後、前方部を築造したという手順でこの古墳が築造されたことを示しており、勝福寺古墳が前方後円墳であることを示唆しているといえよう。

後円部側と前方部側に直径約2 mの円形と考えられる土坑がみとめられた。後円部側(擾乱1)のものについては、深さ約1 mをはかる。当初から盗掘による擾乱とみなされたために、平面プランによる確認などはしていない。前方部側(擾乱2)はかつて鏡が出土した箇所に近いため、2002年度の調査の際には埋葬施設である可能性を想定しながら調査し

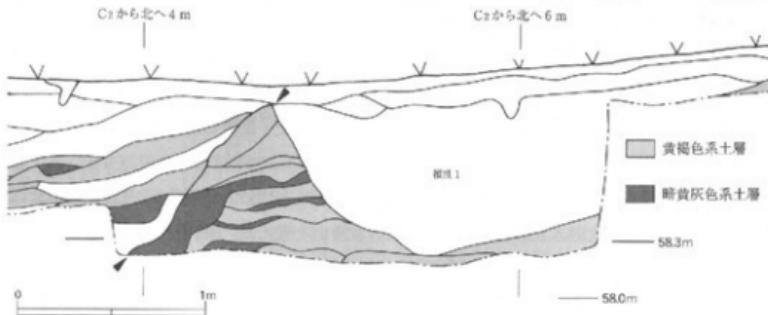


図19 墳頂調査区後円部盛土と前方部盛土の様相

た。

その結果、円形に掘りこまれた平面形から埋葬施設ではなく、盜掘坑であると判断した。その深さは現地表より2m、標高約56.8mにおいて底に達する。盜掘坑の底からは古墳時代のものかと考えられる鉄製の刀子が検出された。

一方、南北調査区の南東部、本調査区の南東端では、現代遺物などの存在から約2m四方の川西市の旧調査区が確認された。その範囲は南棺調査区に及ぶ。おそらく、鏡出土地の確認調査のために設定された調査区であると思われる。2002年度の調査においても、この部分では埋葬施設の痕跡は確認できていない。

(中村大介)

(2) 前方部墳頂南棺調査区(図20)

南棺は前方部の盜掘坑の北側に接するように位置する埋葬施設である。1971年に川西市教育委員会によって発掘調査が行われた(武藤1974)。今回、北棺と南棺との位置関係・南棺のさらに詳細な構造などを調べるために南棺調査区を設定した。川西市史では南墳南棺として「粘土櫛」との報告がなされているが、今回再調査した結果、粘土は検出されたが棺全体を被覆するような形態ではなかったものと判断した。したがって、この埋葬施設を前方部南棺と呼称する。

1971年川西市教育委員会による調査 以下、南棺に関する1971年の調査成果をまとめておく。

- ・長さ約2.7m、幅0.6mと推定される木棺を直葬し、一部を粘土で被覆する。
- ・棺床の平らな箱形木棺が使用されたと考えられる。
- ・両小口部には粘土と繩を裏込めに用いる。
- ・副葬品として山梔子玉39個、金環2個、鉄刀1振、刀子1口、鉄鎌約60本、小孔のある鍍金板状金具が出土した。
- ・東西に主軸をもつ。山梔子玉・耳環の出土した位置から東頭位と考えられる。

南棺の検出状況 調査区の設定は地表面に露出した西側小口部分の粘土層と1971年調査の記録から行った。調査区には覆土がほとんど堆積しておらず、遺構面が露出した状態であった。表面を精査した結果、棺内と思われる部分と小口の裏込めについて平面でプランを確認した。棺中央部に1971年調査時の断ち割りを確認し、この隣面を精査・拡張した。さらに向小口部分にも断ち割りを設定し、墓壙を確認した。

調査区中央には、褐色でやや粘質の土層(第13層)が長方形に広がる状況が認められた。市史の記述からこれを棺床置き土もしくは棺底板の置換土と考える。第13層が棺底板であるとすると、木棺の法量は、長さ2.64m・西小口幅0.58m・東小口幅0.57mをはかるものとなる。墓壙は長さ3.82m、最大幅1.01mをはかる。前方部墳頂は土の流出が激しかったようで、棺床はわずかに数cmを残し上部は失われていた。特に西小口部南側では棺床・墓壙ラインとともに

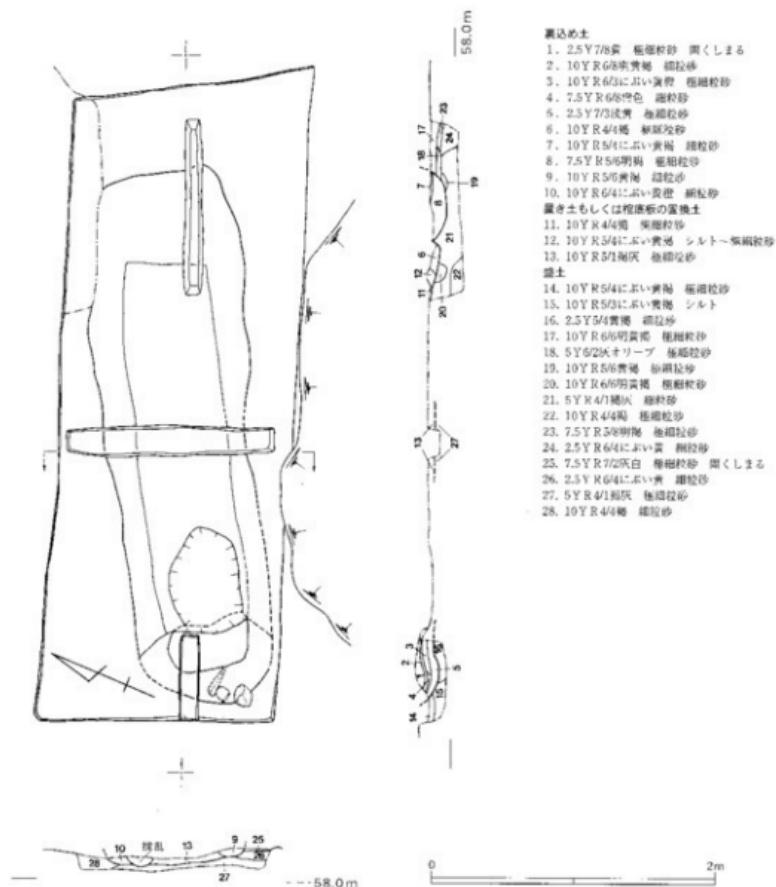


図20 前方部墳頂南柏調査区平面図・断面図

確認することが困難な部分が存在した。

西側小口で黄色層(第1層)と礫3石を確認した。この土層・礫は1971年調査時に確認された小口部分の粘土・礫に相当すると考えられる。これらは東側小口では確認できなかった。断ち割りの断面観察から、西側小口の裏込め土設置部分は、植床部よりも若干深く掘り込まれている状況が確認できる。東側小口部分では裏込め土設置部分、中ほどの第6層と第8層の間に盛土の掘り残しが存在する。小口部分の裏込めは、1971年調査時の岡面・写真から判断すると当

時残存していた躰のみで小口板を安定させることは困難であったと思われる。粘土で躰を内包し、さらに上部にも粘土などを使用して裏込めとしたものと思われる。

横断面断ち割りでは南北側板の裏込め土と考えられる土層(第9・10層)を確認した。北側には根摺があることから詳細な状況は不明であるが、南側第9層は垂直に立ち上がりらず、内傾することから木棺側板腐朽後に土圧で移動した可能性も存在する。

棺床内西側小口部では、不整形な落ち込みを検出した。1971年の調査で、箱状遺構と表現されているものの跡と考えられる。また、東側小口部北側には1971年調査時の調査区が存在しており、墓壇の一部が破壊されている。

今回の調査では、古墳時代に属する遺物は出土しなかった。

(三好)

5 出土遺物

(1) 須恵器(図21)

須恵器は後円部西セクション、西クリベ部調査区、後円部北東調査区、前庭部調査区、東クリベ部調査区、墳頂調査区、前方部南調査区から出土している。いずれも破片であり、完形に復元できるものはない。以下、出土した須恵器のうち主要なものいくつかについて述べる。

坏蓋 1・2は坏蓋の口縁部である。両方とも前庭部調査区から出土している。

1は口縁の13分の1ほどが残存する小片で、復元口径は10.2cmである。前庭部調査区羨道部拡張区の地山直上から出土した。焼成が悪く、白っぽい色調を呈しており軟質である。口縁端部は明瞭な段をなす。天井部と体部との境の稜はやや不明瞭であり、多少凹線化している。

2は口縁の8分の1ほどが残存する小片で、復元口径は12.8cmである。口縁端部に段を持つ。天井部と体部との境の稜はやや不明瞭である。

高坏 3は無蓋高坏である。坏部の大半と脚部の下半部を欠くが、復元高は10~11cmと考えられる。坏部の中位には稜が認められ、口縁はこの部分からやや外方へ向かって立ち上がるようである。坏部の稜よりやや下方から底部にかけてはヘラケズリが施されている。坏部と脚部の接合部から脚部の中位にかけてはカキメが施されている。脚部は上半部が良好に残存しているが、透孔は残存している部分においては確認できない。したがって、脚部に長方形の大きな透孔があけられていた可能性はない。仮に透孔が存在したとしても円形あるいは方形の小さなものであったと推定される。

器台 4~6は高坏形器台である。いずれも東クリベ部調査区から出土している。これらは胎土や焼成、文様などからすべて別個体と考えられる。

4は壊部の破片である。縦11.5cm、横12.5cmの破片で、口縁の8分の1程度が残存する。復元口径は34.1cmで、壊部の深さは13~14cmと考えられる。口縁は短く外反し、端部は肥厚する。外面には中位に2本1組の凹線が施されており、その後に波状文が2段にわたって施されている。波状文は上は19本を1単位、下は17本を1単位として施されている。波状文より下にはカキメが施されている。波状文とカキメの先後関係は判然としないが、おそらくカキメによる調整の後に波状文をしたものと思われる。内面の口縁端部付近には、焼成時に付着した窯体の一部と思われる粘土の塊が付着している。接合はしないが、同一個体と考えられる壊部の破片が同じく東クビレ部調査区より数点出土している。

5は脚部の上半部である。脚部径の3分の1強が残存しており、最大径は11.6cmに復元される。下方へ向かってあまり広がらず、円筒状の形態を呈している。外面はカキメによって調整されており、その後に2本1組の凹線が施され、その上下に波状文が施されている。施されている波状文は櫛状工具の静止痕が明瞭である。また、凹線の上下には波状文を施した後に透孔が開けられている。上の透孔は長方形で、下の透孔は三角形である。透孔は三方に開けられていたものと考えられる。内面にはナデが施されるが、一部には成形時の粘土接合痕が明瞭に観察される。

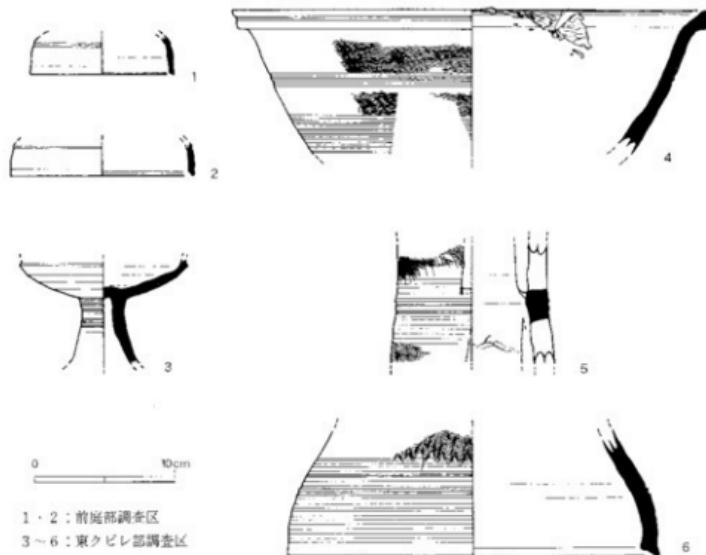


図21 須恵器実測図

6は脚裾部である。縦9.5cm、横6.4cmの破片で脚端部径の13分の1ほどが残存している。脚端部の復元径は26.3cmである。脚端部へ向かってやや内湾しながら広がる。脚端部は強いナデによって面をなすが、面全体が接地するのではなく外側の端部のみが接地している。脚端部より7cm上まではカキメが施されている。また、脚端部より高さ4.8cmの部分に2本1組の凹線が認められる。接合はしないが、同一個体と考えられる脚部の破片が同じく東クビレ部調査区より数点出土している。

高坏形器台はこのほかにも多くの破片が東クビレ部調査区から出土している。坏部と脚部が接合するものがなく、坏部と脚部の対応関係が不明であるが、胎土や焼成、文様、調整などからみて最低6個体は存在するものと考えられる。各個体とも破片数が少ないとから全体の形状を復元することは難しいが、脚部はるのように上半部が円筒状になり、脚裾部付近では6のようにやや内湾するものが主流のようである。

その他 このほかに、器種が判別できるものとしては、西クビレ部調査区から壺あるいは広口壺、後円部西セクションから短頸壺や壺あるいは広口壺、墳頂部調査区から無蓋高坏、後円部北東調査区から坏蓋、東クビレ部調査区から甕と広口壺・短頸壺、前方部南調査区から甕と坏蓋が出土している。

須恵器の編年的位置づけ 1の坏蓋は口径が小さく、口縁端部に明瞭な段がある点はTK 47型式期の特徴を示している(田辺1966・1981)。しかしながら、体部と天井部の境の後がやや不明瞭な点などからMT 15型式期に属する可能性がある。2の坏蓋は、口縁端部に段をもち、体部と天井部の境の後がやや不明瞭である点などから判断するとMT 15型式期からTK 10型式期の特徴を示している。

器台は先に述べたような脚部の特徴から、MT 15型式期以降に属するものと考えられる。勝福寺古墳の周辺では、尼崎市園田大塚山古墳よりMT 15型式期の特徴を持つ坏身・坏蓋などの須恵器が出土しており、高坏形器台も4個体ほど出土している。それらの器台と勝福寺古墳の器台を比較すると、脚部の形状や坏部の深さなどが類似しており、園田大塚山古墳と勝福寺古墳の器台はほぼ同時期の所産であると考えて矛盾はない(岡田ほか1987)。こうした点から、勝福寺古墳の器台はMT 15型式期に属する可能性が高いと考えられる。

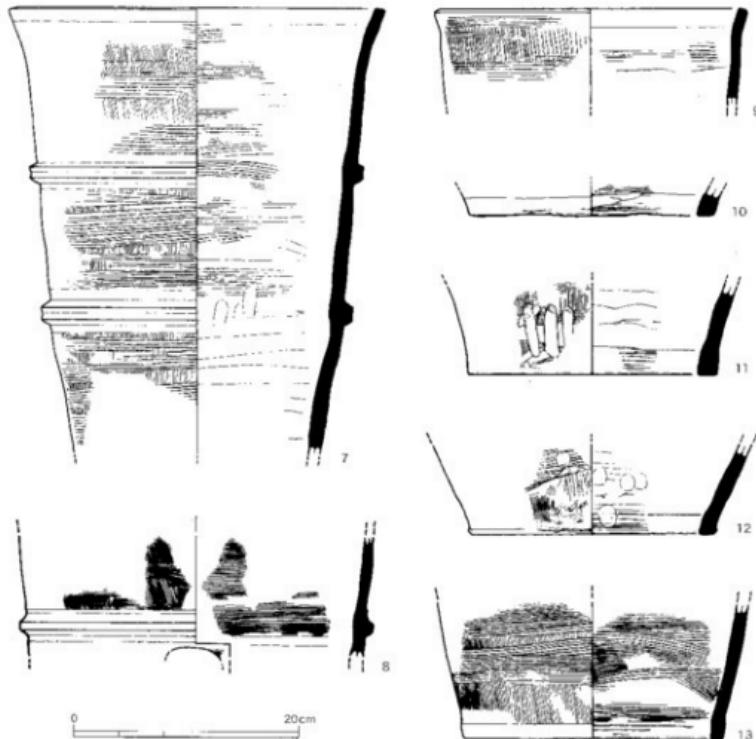
以上より、出土した須恵器のうち時期が確定できるものに関しては、ほとんどが田辺昭三の須恵器編年MT 15型式期の範疇に収まるものと考えられる(田辺1966)。 (石井智人)

(2) 墳 輪

円筒埴輪(図22) 円筒埴輪には普通円筒埴輪と少量の朝顔形埴輪がみられる。出土埴輪片は3000点を超す。ほとんどが小破片であり、残存状況の良好なもので7が円周の4分の1程度であり、13は円周の2分の1程度残存する。8~12については、円周の6分の1以下の残存状況

である。焼成は大半が土師質であり、須恵質の埴輪片もわずかに認められる。黒遜はみられない。また、少數ではあるが、外面に赤色顔料を塗布したものがある。当古墳出土埴輪の形態や製作技法の特徴を示すものを選別して図22に掲げた。以下の記述においては、個体ごとに記述をしたのちに、当古墳出土埴輪の特徴を総括的に述べることとする。

7は口縁部と2条の突帯が残存する。復元した口縁部径は33.2cmをはかり、残存高は39.3cmである。各段の高さは上から、14.0cmと12.3cmである。口縁部は緩やかに開きながら立ち上がり、端部は外傾する面をもつ。外面調整はタテハケをおこなったのちに、ヨコハケを施している。条線密度はともに4~5本/cmである。ヨコハケにはハケ工具の静止痕や細かなハケメの切り合いが認められることから、強い回転による調整であると判断できる(図版12-1)。



7・12：舷内部北東調査区 8・13：後内部北調査区 9・10：東クビレ部調査区 11：前底部調査区

図22 圓筒埴輪実測図

突帯は器壁からの高さが7mmで、端面がわずかに内湾する。端面の中央には棱線が明瞭に確認できる(図版12-2)。このことは突帯の調整に工具を用いていた可能性を示唆するものである。また、突帯を貼り付ける際のナデがヨコハケを切るかたちでみられることから、ヨコハケを施したのちに突帯にナデをおこなっていることがわかる。ただし、ヨコハケと突帯の貼り付けの先後関係は不明である。突帯の下辺はナデが不充分であり、器壁との密着度は弱い。内面調整はヨコハケと横方向のナデが認められる。突帯の貼り付く内面にはヨコハケを切るかたちで横方向のナデが認められ、突帯を貼り付ける際に内面にユビをあてがっていたことがわかる。なお、透孔の形態および配置は不明である。

9は円筒埴輪の口縁部である。復元口縁部径は27.6cmで、残存高は8.5cmである。口縁部は緩やかに開きながら立ち上がり、端部付近でやや屈曲して外反している。端部はナデが施されており、やや外傾する面をもつ。調整をみてみると、外面はタテハケをおこなったのちに、回転性の強いヨコハケを施している。ハケ調整の条線密度はともに3~4本/cmである。内面調整はヨコハケをおこなっており、条線密度は4本/cmである。なお、口縁端部には外面のヨコハケをおこなったのちに、ナデが施されている。

8は円筒埴輪の胴部である。復元最大径は31.2cmをはかる。外面の調整はタテハケをおこなったのちに、ヨコハケをおこなっている。ハケ調整の条線密度は9~10本/cmである。突帯の断面形は台形を呈し、端面がわずかに内湾する。器壁からの高さは6mmで、比較的高くしつかりしている。内面の調整はヨコハケがみられ、条線密度は10本/cmである。突帯の貼り付く内面は、それよりもやや低い位置のヨコハケを切るかたちでナデが施されている。なお、円形の透孔が認められるが、配置は不明である。焼成は須忠質である。

10~13は円筒埴輪の底部である。10は復元底部径21.6cmをはかり、残存高は2.2cmである。調整をみてみると、外面には回転性の強いケズリが認められる。内面にはヨコハケが施されている。底部の端部付近にはヨコハケを切るようにして横方向のケズリが認められる。内面のケズリは上下2回の動作が確認でき、上部のそれがさきにおこなわれている。なお、器壁が摩滅しているため、ケズリの回転方向は内外面ともに不明である。底面を観察すると、内面側が高く外面側が低い段差が認められる(図版12-5)。この段差は比較的シャープなものであり、鋭利な工具によってつけられた痕跡と思われる。また、内面側の高い部分には作業台からの離脱を容易にするために敷いていたものの圧痕が確認できる。

11は復元による底部径が21.8cmをはかり、残存高は8.1cmである。まず外面調整をみてみると、9~10本/cmのタテハケが認められる。タテハケの後に、ヨコハケがおこなわれており、条線密度は9本/cmである。底部下端にはタテハケを切るようにして、横方向のケズリがみられる。また、外面には5本の擦痕が認められる(図版12-8)。下部の2本は幅5~9mmで、左右に動いた痕跡である。残りの3本は縱方向で、その幅は1cm程度である。移動した粘土が上

側に認められることから、縦方向の擦痕は下から上へとされたものと判断できる。また、この痕跡の上下端の形状が円形であり、かつ断面が緩やかに窪むことから、指頭あるいは指の関節によるものと思われる。内面調整をみると、横方向のナデが施されている。このナデを切るようにして、底部下端付近には横方向のケズリが認められる。ケズリの幅は2.2cmである。底部下端から4.5cmほど上がったところに粘土紐の接合痕が確認でき、断面を観察すると内傾接合であることがわかる。なお、内外面のケズリの回転方向は不明である。底面をみると、やや内側により幅0.5mmの沈線が認められる(図版12-6)。

12は復元底部径21.2cmをはかり、残存高は7.8cmである。外面調整はヨコハケを施し、その条線密度は5~6本/cmである。このヨコハケを切るかたちで、擦痕のような痕跡が認められる(図版12-7)。この痕跡の上端には粘土の移動が確認できる。また、複数箇所にわずかな段差がみられ、上端には器壁内に細いものがくい込んだような状況が認められる。これらのことから、この痕跡がヒモのような細いものが下から上へとされた際に生じたものであることを示している。内面には横方向のナデの後に、底部下端付近に幅1.8cmの横方向のケズリを施している。ケズリの回転方向は不明である。底部下端から3.3cmほど上がったところに粘土紐の接合痕が認められ、内傾接合であることがわかる。底面には纖維状の圧痕が認められる。

13の復元底部径は22.6cmで、残存高は12.0cmである。外面調整は6本/cmのタテハケを施したのちに、5~7本/cmの回転性の強いヨコハケをおこなっている。ヨコハケの後に、底部下端付近に横方向のケズリを施している(図版12-3)。ケズリの幅は1.3cmである。内面調整はヨコハケをおこなったのちに、底部下端から2.0cmの幅で回転性の強いケズリを施している(図版12-4)。ハケメの条線密度は5本/cmあるいは8~9本/cmである。器壁が摩滅しているため、外面のケズリの回転方向は不明であるが、内面のケズリの回転方向は上からみて時計回りである。なお、内外面のケズリはともに回転性の強いものである。

さて、円筒埴輪の特徴をまとめておくこととする。まず、各部位の形態についてみると、口縁部は緩やかに開きながら立ち上がり、口縁端部に外傾する面をもつ。突帯は比較的のしっかりしており、端面が窪む。また、突帯の端面に明確な稜線をもつものが散見される。透孔については円形であるが、配置は不明である。つづいて調整をみると、外面調整はタテハケをおこなったのちに、回転ヨコハケを施すことを基本とする。内面調整にはヨコハケや横方向のナデがおこなわれている。また、底部にはすべて底端部の内外面に回転ケズリが施されており、ケズリの幅は2.0cm前後である。なお、少数ではあるが、底面に段差あるいは沈線状の痕跡が確認できる。

全形については判明する資料がないため、残存状況の良好な7の復元案を考えてみたい。7の最下部は直径21.8cmをはかり、この数値はほかの底部径と大差がないことから、7は最下段を含む資料と判断できる。このことは器壁の厚さからも示唆される。また、底端部付近に施さ

れる回転ケズリがみられないことから、底端部までは2cm以上あると考えられる。これらのことから7は2条3段で、復元高が42cmを超える円筒埴輪が復元できる。最下段の高さが高く、口縁部に向かって緩やかに開きながら立ち上がる形態であろう。

形象埴輪(図23・24) 形象埴輪片は100点程度であり、いずれも小破片である。ここでは残存状況の良好な甲冑形埴輪と形象埴輪の脚部を図示した。

図23は、2条1組の沈線と円板状粘土によって特徴づけられる埴輪である。沈線は2条1組を基本としており、竹管状の工具を用いてひかれていると考えられる。沈線は外形を縁取るように施されており、17・18のように三角形状の区画をもつ。三角形状の区画は上下対照に配置されていることが、18からわかる。また、沈線の交わるところには、直径1.8~2.5cm、厚さ0.6~1.0cmの円板状粘土を貼り付けている。

こうした特徴をもつ埴輪は、大阪府東大阪市大賀世3号墳出土の甲冑形埴輪(上野・中西1985)に類似する。甲冑形埴輪を考えると、沈線による三角形状の区画は三角板を表現しているといえる。一方、円板状粘土は鉢留めの表現であろう。ただし、鉢は沈線の交点に貼り付けられていることから、鉄製甲冑のそれを忠実に模倣しているとはいえない。大賀世3号墳例を



図23 甲冑形埴輪実測図

参考にすると、16・17は短甲の裾部に相当すると考えられ、裾部の形状は緩やかに開くものである。また、15は短甲の押付け板に相当する部分と思われ、14は胃の裾板にあたる可能性が考えられる。

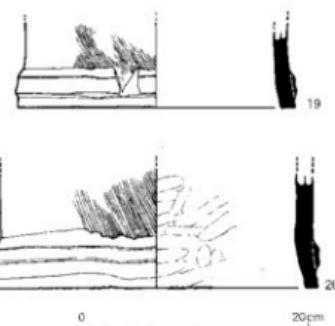
図24-19は復元底部径24.4cmであり、円周の10分の1以下の残存状況を示す。底端部からやや上がった位置に1条の突帯をめぐらす。突帯は断面形が台形を呈し、端面が内湾する。突出は非常に低い。突帯の上辺は貼り付け時のナデ調整が不十分であったために、器壁との密着度が弱い。また、底面および底端部にはナデをおこなっている。外面調整は突帯貼り付け前にタテハケをおこなっている。ハケ調整の条線密度は6条/cmである。内面は摩滅が激しいため、調整は不明である。

図24-20の復元底部径は28.6cmをはかり、残存状況は円周の10分の1以下である。内面調整は斜め方向あるいは横方向のナデが認められる。外面調整は突帯の貼り付け前にタテハケをおこなっている。ハケ調整の条線密度は5~6条/cmである。これらの調整をおこなったのちに、底面および底端部にナデを施している。外面には底端部からやや上がった位置に突帯を貼り付け、この時のナデが底端部のナデを切っている状況が確認できる。突帯の断面形は台形を呈し、端面が直線でいる。器壁からの高さは低い。なお、突帯上辺の器壁への密着度は弱い。

19と20にみられるこうした特徴は奈良県磯城郡三宅町石見遺跡出土の石見型埴輪(末永1932、千賀編1988)の脚部に類似していることから、形象埴輪の脚部と考えられる。また、底端部付近および底面にナデを施していること、突帯の上辺において器壁との密着度が弱いことを考え合わせると、この脚部は倒立技法(高橋1992)によって製作されている可能性が高い。

埴輪の位置付け ここでは円筒埴輪の系譜と、埴輪の編年的な位置付けについて考えてみたい。まず、製作技法からみた円筒埴輪の系譜について述べていくこととする。

上記のような特徴をもつ円筒埴輪は、勝福寺古墳が位置する猪名川流域では認められない。また、回転ヨコハケや底部の回転ケズリなど、個々の製作技法も当地域にはみられないものであることから、当地域で白牛的に出現した技法によって製作された円筒埴輪とは考えにくい。そこで、他地域に目を向けると、類似する円筒埴輪として尾張地域に分布する尾張型埴輪が注目できる。尾張型埴輪は川西宏幸が東海地域の特色として底部調整のヨコケズリと回転ヨコハケに注目したのが最初であり(川西1978)、その後、赤塚次郎によって諸要素を加えて定義されたものである。赤塚によると、尾張型埴輪は底部設定技法である味美技法、回転原理に基づく



19: 東クビレ部調査区 20: 前庭部調査区

図24 形象埴輪底部実測図

調整技法、ケズリやナデなどの底部調整といった製作技法を有し、2条3段の小型品を基本形とする一群の円筒埴輪である。また、大型品には2分割倒立技法が認められるものがあり、分割倒立周辺にタタキを施す場合がある（赤塚1991）。

尾張型埴輪については赤塚の論文以降、それほど研究の進展がみられない。そうしたなかで、犬塚康博による味美技法の再検討は重要なものといえる。赤塚は底面の痕跡を底部設定用の工具によるものと考え、底部外面周辺のズレをこの工具の離脱痕とみなしている（赤塚1991）。一方、犬塚は詳細な観察と製作実験に基づき、底面の痕跡は回転を利用した工具による切り離し（ヨコギリ）とみなし、また、底部外面周辺のズレについてはヒモ状工具をもちいて円筒埴輪を持ち上げる際のものであるとする（犬塚1994）。再検討を要する部分もあるが、ここでは犬塚の認識に賛同したい。

さて、勝福寺古墳出土の円筒埴輪に認められる回転ヨコハケと底部の回転ケズリという組み合わせは、尾張型埴輪に特徴的に認められるものである。また、底面の痕跡や底部外面周辺の痕跡はそれぞれヨコギリとヒモズレおよびユビズレとみなすことができる。したがって、当墳出土の円筒埴輪は小型の尾張型埴輪の製作技法との共通性が高いと考えられる。このことは、その製作にあたって尾張型埴輪の製作工人集団との強いかかわりを示唆する。

近畿地方において類例をさがすと、滋賀県長浜市垣籠古墳例（稻葉編1999）があげられる。垣籠古墳出土の円筒埴輪には外面調整の回転ヨコハケ、内面調整のヨコハケ・横方向のナデ、底端部付近の回転ケズリ・ナデ、底部外面周辺の縄状圧痕、底面の円弧上の痕跡が認められることから、小型の尾張型埴輪の製作技法との共通点が指摘できる。なお、辻川哲郎は垣籠古墳出土の円筒埴輪とともに、滋賀県長浜市柿田西2号墳例（坂本編1999）も尾張型埴輪の可能性があることを指摘している（辻川2003a・b）。

一方、近畿地方には尾張型埴輪のなかでも大型品の製作技法の影響を受けた円筒埴輪が認められる。それは最下段の高さが著しく高い形態をもち、倒立技法によって製作されている1群である。大型品には底端部の回転ケズリは認められず、倒立する箇所や底部にはタタキが施されている。また、外面には回転ヨコハケを施し、内面の調整も回転原理によるものである。例としては、京都府八幡市荒坂B5号墳例があげられる。また、タタキは認められないが、倒立技法を用いていることから、京都府宇治市五ヶ庄二子塚古墳出土の円筒埴輪と京都府京田辺市掘切7号墳出土例（林ほか編1989）も大型の尾張型埴輪の影響を受けたものと考えられる。

このように近畿地方にはふたつの尾張型埴輪の影響を認めることができる。ひとつは2条3段の小型品の製作技法によって製作された1群であり、もうひとつは大型品の製作技法を用いた1群である。近畿地方においてこれらは10例に満たない出土例であるが、両群の製作技法が一古墳において認められる例はない。また、近畿地方における尾張型埴輪の出土地域が、縦体大王との関連が指摘されている地域と重複する部分が多いことは重要である。

さて、当墳から出土した埴輪の時期についてであるが、円筒埴輪はすでに述べてきたように猪名川流域のなかで位置づけることは困難である。一方、尾張型埴輪の編年案については赤塚によって提示されているが(赤塚1991)、充分に議論されているとはいえない。また、赤塚の編年案は主として尾張地域を対象としたものであり、他地域に適応できるかどうかは未検討である。

そこで、形象埴輪の脚部に注目したい。底部に突帯をめぐらし、倒立技法によって製作されている形象埴輪の脚部は、古墳時代後期に認められる。古墳時代後期における形象埴輪の脚部はこうした特徴に加えて、非常に長大化した形状を呈する(高橋1992)。

したがって、当墳出土の埴輪から古墳築造時期を考えるならば、細かな時期比定は困難であるが、古墳時代後期に属するものといえる。
(和田一之輔)

6 総 括

今回の勝福寺古墳の調査では、これまで不明瞭であった攝津地域の古墳時代後期首長墓について重要な知見を得ることができた。現時点での成果を概括しておきたい。

墳丘の規模と形態 勝福寺古墳の墳丘構造は、これまでの調査により墳長40m、後円部径26mであると推定される。また、後円部墳裾が標高56.5mであるのに対し、前方部南調査区で確認された墳裾は標高52.6mと、実に4mもの比高差が認められる。前方部については、前方部南調査区において墳丘裾部を検出したのみであり、クビレから前方部の形状を確定するに至ってはいない。東クビレ部調査区における成果を重視すると当調査区のさらに外側に墳丘裾が存在すると考えられ、その場合、前方部は非常に幅広であると推定できる。

墳頂部調査区において、後円部盛土が前方部側盛土に先行して構築された様相が確認されたことから、かつて唱えられてきたような円墳2基の連続説は完全に否定できよう。さらに埴輪が、少量ではあるが前方部南調査区で確認されていることも重要である。これにより勝福寺古墳は後円部のみならず前方部にも埴輪を設置していたと判断できよう。また從来、葺石として報告されていた疊群は、地山に含まれる亜角礫を誤認したものであることが、東クビレ部調査区と前方部南調査区において明らかとなった。

埋葬施設 前方部墳頂部では、1971年に川西市教育委員会により調査された南棺と、鏡の表採などから想定されてきた北棺の範囲を調査した。南棺では、覆土がほとんど堆積しておらず、遺構面が露出した状態であったが、長さ2.64m・幅0.6mの範囲に粘質土層の広がりが確認できた。これが木棺痕跡であるとすると、木棺規模は、長さ2.64m、幅0.6mと想定できる。一方、北棺を検出することはできなかった。ただし、想定範囲において南北2m、東西3.5m以上の擾乱が検出された。この擾乱規模とかつての鏡、刀片の出土を重視するならば、この範囲

に直葬系の埋葬施設が存在した可能性が想定できよう。

出土遺物 また、東クビレ部調査区を中心に多数の埴輪と須恵器が出土したこと大きな成果である。須恵器は、おおむね MT 15型式期に帰属することが判明した。一方、円筒埴輪には回転ヨコハケや底部の回転ケズリ、ヨコギリといった技法が採用されており、底部外面周辺にはヒモズレ・ユビズレが認められた。これらの特徴の組合せは、尾張・美濃地域の円筒埴輪に特徴的なものである。したがって、当墳の埴輪生産にあたっては、尾張・美濃地域の埴輪製作工人との強いかかわりが想定できる。

以上の成果をまとめると、勝福寺古墳は、墳長40mの前方後円墳であり、後円部に少なくとも1段のテラスを有し、埴輪を樹立するものの葺石はもたない。後円部には横穴式石室を有し、前方部墳頂には2基の木棺直葬が構築されていた。また、築造時期は出土した須恵器等からMT 15型式期に遡るとみられ、定型的な畿内型横穴式石室を有する古墳としては、最も古い1群に属することとなる。

注

荒坂B5号墳例は未報告資料であるが、京都府埋蔵文化財調査研究センター伊賀高弘氏、八幡市教育委員会八十島農成氏のご教示とご協力により実見することができた。また、五ヶ庄二子塚古墳例も確実な当該資料は未報告であるが、宇治市教育委員会吹田直子氏のご教示により実見することができた。以上の各機関の方々には、未報告資料の実見に際して、格別のご配慮を賜った。記して感謝します。

参考文献

- 赤塚次郎 1991「尾張型埴輪について」『池下古墳』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第24集、財團法人愛知県埋蔵文化財センター、34~50頁
- 稲葉隆宣編 1999『上寺地遺跡・北郷里小遺跡』は場整備関係遺跡発掘調査報告書26-3、滋賀県教育委員会・財團法人滋賀県文化財保護協会
- 大塚康博 1994「『味美技法』批判」『名古屋市博物館研究紀要』第17号、名古屋市博物館、23~32頁
- 玄野 強 1976「古墳時代の遺跡と遺物」『かわにし』川西市史第4巻資料編I、川西市史編集専門委員会、81~104頁
- 上野利明・中西克宏 1985「大賀世2・3号墳の出土遺物について」『財團法人東大阪市文化財協会紀要』I、財團法人東大阪市文化財協会、95~131頁
- 梅原末治 1935「攝津火打村勝福寺古墳」『近畿地方古墳墓の調査』日本古文化研究所報告第一、日本古文化研究所、43~51頁
- 岡田 務 1987「尼崎市中ノ田遺跡II(大塚山古墳を中心に)」、尼崎市教育委員会
- 岡野慶隆 2001「西摂地域の弥生集落」「みずほ」第35号、大和弥生文化の会、66~81頁

- 金光正裕・合田幸美 1994「螢池東遺跡(1・2)」「宮の前遺跡・螢池東遺跡・螢池遺跡・螢池西遺跡
1992・1993年度発掘調査報告書」、財団法人大阪文化財センター、35~116頁
- 龜田隆之 1974「律令制下の川西地方」『かわにし』川西市史第1巻、川西市史編集専門委員会、216~321頁
- 川西宏幸 1978「円筒埴輪論」『考古学雑誌』第64巻第2号、日本考古学会、1~70頁
- 木村次男 1929「摂津の銘鏡出土の古墳」『考古学雑誌』第19巻第11号、日本考古学会、20~27頁
- 近藤義郎 1960「地域集團としての月の輪地域の成立と発展」『月の輪古墳』、月の輪古墳刊行会、368~387頁
- 祭本敦士 2002「勝福寺古墳2次調査」『平成13年度川西市発掘調査概要報告』、川西市教育委員会、21~24頁
- 祭本敦士・青木あかね 2003「勝福寺古墳第4次調査」『平成14年度川西市発掘調査概要報告』、川西市教育委員会、12~15頁
- 坂本正裕編 1999「墓立遺跡・柿田遺跡・正蓮寺遺跡調査報告書(第1冊)」長浜市埋蔵文化財調査資料第25集、長浜市教育委員会
- 末永雅雄 1932「磯城郡三宅村石見出土埴輪報告」『奈良県史蹟名称天然記念物調査報告』第十三冊、奈良県、1~34頁
- 清家 章 2001「猪名川左岸域における小古墳の意義」『待兼山遺跡』Ⅲ、大阪大学埋蔵文化財調査委員会、74~88頁
- 清家 章耀 2001「勝福寺古墳測量調査報告書」、大阪大学大学院文学研究科考古学研究室
- 高橋克壽 1992「器財埴輪」「古墳時代の研究」第9巻古墳Ⅲ埴輪 雄山閣出版、90~108頁
- 田中晋作 1990「百舌鳥・古市古墳群の被葬者の性格について」『古代学研究』第122号、古代学研究会、28~50頁
- 田辺昭三 1966「陶邑古窯址群」Ⅰ、平安学園考古学クラブ
- 田辺昭三 1981「須恵器大成」、角川書店
- 千賀 久緒 1988「大和考古資料目録」第15集石見遺跡資料、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
- 都出比呂志 1988「古墳時代首長系譜の継続と断絶」『待兼山論叢』史学編第22号、大阪大学文学部、1~16頁
- 都出比呂志 1999「首長系譜変動パターン論序説」『古墳時代首長系譜変動パターンの比較研究』文部省科学研究費成果報告、大阪大学文学部、5~16頁
- 辻川哲郎 2003a「近江における古墳時代中・後期の円筒埴輪—長浜古墳群・息長古墳群を中心にして—」『日縦知らす可き王無し—継体天皇の出現—』平成15年度春季特別展解説図録、滋賀県立安土城考古博物館、82~85頁
- 辻川哲郎 2003b「長浜市垣籠古墳の再検討」『考古学に学ぶ(Ⅱ)』同志社大学考古学シリーズ叢、同志社大学考古学シリーズ刊行会、389~400頁
- 寺前直人 2001「古墳時代中期における倭王権の地方支配方式」『待兼山遺跡』Ⅲ、大阪大学埋蔵文化

- 財調査委員会、62~73頁
- 林 正はか編 1989『駒切古墳群調査報告書』田辺町埋蔵文化財調査報告書第11集、田辺町教育委員会
- 福永伸哉 1996「吉野山古墳と近江の前期古墳」『雪野山古墳の研究』考察篇、雪野山古墳発掘調査團、293~308頁
- 武藤 誠 1974a「考古学からみた川西地方」『かわにし』川西市史第1巻、川西市、139~142頁
- 武藤 誠 1974b「はじめに」『川西市史』川西市史第1巻、川西市、1~8頁
- 村川行弘 1980「古墳時代」『尼崎市史』第11巻、尼崎市、164~279頁
- 森岡秀人 1990「前方後円墳からみた古墳時代の阪神地方」『考古学論集』第3集、考古学を学ぶ会、235~268頁
- 山本 建はか 1988「新免遺跡第19・21・22調査」『農中市埋蔵文化財発掘調査概要1987年度』、農中市教育委員会、19~65頁



1. 後円部北調査区全景（1）（北から）



2. 後円部北調査区全景（2）（北から）



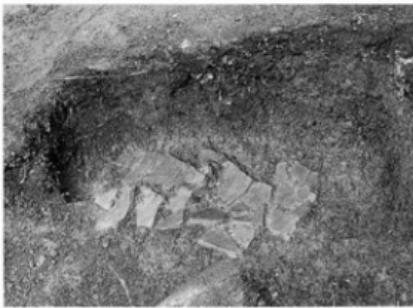
3. 後円部北調査区埴輪出土状況



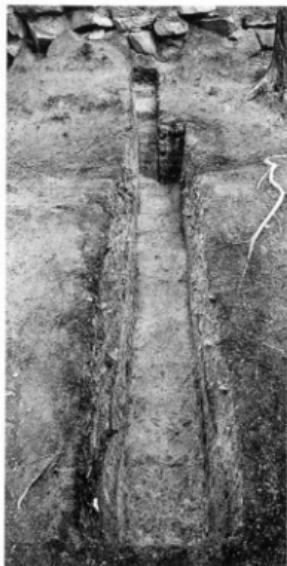
1. 後内部北東調査区全景（北から）



2. 後内部北東調査区溝状遺構（東から）



3. 後内部北東調査区埴輪出土状況（西から）



1. 後円部西調査区全景（西から）



2. 後円部西セクション全景（北から）



3. 後円部西セクション全景（西から）



1. 東クビレ部調査区（2002年度）全景（東から）



2. 東クビレ部調査区（2003年度）全景（南から）



3. 東クビレ部調査区（2002年度）全景（西から）



1. 東クビレ部調査区（2002年度）北壁土層（1）



2. 東クビレ部調査区（2002年度）北壁土層（2）



3. 東クビレ部調査区（2002年度）
西壁土層



5. 西クビレ部調査区全景（西から）



4. 東クビレ部調査区（2003年度）
土坑（北西から）



1. 前方部南調査区（2003年度）全景（南から）



2. 前方部南調査区東壁土層



1. 前方部南調査区（2002年度）全景（南から）



2. 前方部南調査区（2002年度）土層
(上：北壁 下：西壁)

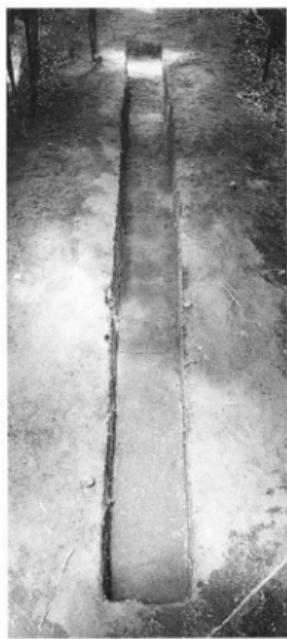


3. 前方部南東調査区全景（南東から）



4. 前方部西調査区全景（西から）

図版8



1. 填頂調査区（2001年度）全景
(北から)



2. 填頂調査区（2001年度）土層（上：東壁 下：西壁）



3. 填頂調査区（2002年度）全景（北から）



1. 墳頂調査区（2002年度）
鉄器出土状況



2. 墳頂調査区（2002年度）盜掘坑土層



3. 前方部墳頂南柵調査区全景（北から）



1



2

1. 須恵器坏蓋



3

2. 須恵器無蓋高坏



3. 須恵器器台



4. 円筒埴輪（1）

7



13 内面

5. 円筒埴輪（2）

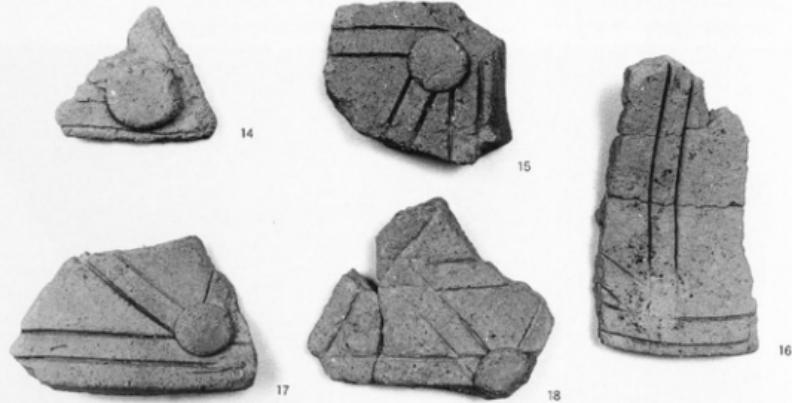


13 外面

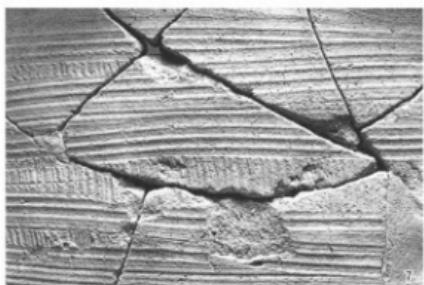
6. 円筒埴輪（3）



1. 円筒埴輪（4）



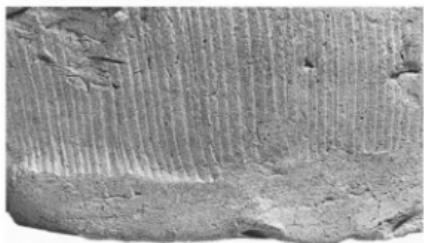
2. 甲冑形埴輪



1. 円筒埴輪の外面調整



2. 円筒埴輪の突帶



3. 円筒埴輪底部のヘラケズリ（外面）



4. 円筒埴輪底部のヘラケズリ（内面）



5. 円筒埴輪底面のヘラギリ

10



6. 円筒埴輪底面の沈線

11



12

7. 円筒埴輪底部のヒモズレ



11

8. 円筒埴輪底部のユビズレ

